
野郎達の英雄譚

peixe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野郎達の英雄譚

【Nコード】

N5699Y

【作者名】

peixe

【あらすじ】

ディープファンタジーという、マイナーなMMORPGがあった。そんなマイナーMMOの運営終了日。最後のイベント『邪神封印』の終了と共に起こる、ありえないアクシデント。

参加者100人、このゲームを愛していた廃人達だった。

- このゲームが大好きだった、ゲームだったなら・・・の話だけど -

過疎MMO最終日から始まる、廃人ネカマ野郎と駄目人間たちが織り成す、ゲーム世界に旅立ちちゃったよ的なお話です。

本作はTS要素を含みます。

本作はグロ・スカ・その他読者の皆様を不快な気分にする表現を含みます。

作者素人故に文章や表現に珍妙で稚拙な部分が存在します。設定矛盾とご都合主義を多分に含みます。

それでもいいという奇特な方のみお進み下さい。

第一話 ネットゲーの終わり

【重要】ディープファンタジーサービス終了のお知らせ XX/1
0/24 09:15

日頃より「ディープファンタジー」をご愛顧頂き、誠にありがとうございます。
でございます。

ディープファンタジーサービス終了のお知らせ

20XX年4月1日よりサービスを開始いたしましたディープファンタジーにおきまして、
20XX年12月31日を持ちましてサービスを終了させて頂く事になりました。

当サービスに関しまして、多数のお客様よりご意見、ご指摘など貴重なお言葉を頂き、
より満足いただけるゲーム開発・運営の維持、サービスの向上など、当社内部での協議、
検討を行ってまいりましたが、サービスの終了を決断をせざるを得ない状況となりました。

ディープファンタジーをご愛顧頂きました皆様には、サービス終了という結果になりました事
深く、深くお詫び申し上げます。

20XX年12月31日のサーバークローズまでの短い期間となりますが、

引き続きディープファンタジーをお楽しみ頂ければ幸いです。

サービス終了までのスケジュール

・20XX年10月24日(月)

サービス終了のお知らせ

・20XX年10月31日(月) 24:00

新規会員登録終了

利用権販売停止

・20XX年11月30日(木) 24:00

サーバー無料開放開始

お問い合わせサポート終了

・20XX年12月31日(土) 20:00～23:59

最終イベント・邪神封印

・20XX年12月31日(土) 24:00

ゲームサービス終了

サポートについて

・お問い合わせサポートは20XX年11月30日まで受け付けております。

20XX年11月30日24:00移行、お問い合わせ頂きました
た一切の内容に関して、
ご返答出来なくなります。

今までディープファンタジーに関して様々なご意見、ご感想をお寄せいただきました多くのお客様に、
運営チーム一同、厚く御礼申し上げます。

短い期間ですが、今後ともディープファンタジーを宜しくお願い

たします。

20XX年10月24日(月) ディープファンタジー開発・運営
チーム

12月31日、午後19時55分。僕はこの会社での最後の仕事を
するためにパソコンに向かっていた。世間では大晦日だが、僕は
まだ仕事である。

制御工学系の大学を出て、この会社に勤めて早4年。その間、僕
はディープファンタジーの開発兼主任GMだった。

初めて会社行った時にいきなりGMをやれ！人手が足りん！とい
われて初めて触ったのMMOがディープファンタジー。

ゲームは好きだったが、後輩に「ネットゲームだけはやらない方
がいいですよ。ウチみたいになるんで」と僕より1年年上の後輩（
あだ名がセンパイ）に散々脅されていたので、ネットゲームは触ら
ないようにしていたのだ。

センパイは重度のMMOジャンキーで、相当のオタクで引き籠も
りがちになり、留年したと言う。馬鹿だがいい人だ。何だかんだで
研究の指導やらなにやら色々やっているうちに親友と言える間柄に
なったので研究室ではいつもつるんでいた。センパイがそれなりに
好きだというMMOに興味が無かったわけではないので、面接の練
習のつもりでこの会社を受けた。面接のつもりがGMになっていた。
何を言っているか良くわからないが、僕も良くわからない。まさに
ポルナレフだ。

それから4年。長いようで短かった。僕は何が何やら判らないうち
にこの会社に就職し、GMとして、開発者の1人（恐るべき事にこ

のゲーム、開発も人手不足だったらしい。）になっていた。

長いようで短い、4年の月日は、僕がディープファンタジーの世界が好きになるのには十分な時間だった。

世間ではそんなに好評では無かったようだ、割とシビアな世界観とバランスは玄人向けであったので、ある程度「判って」いる奴らしか残らなかった。社長も「判ってる奴らだけ残ればいい」というスタンスだったので、色々口論にもなった。こだわりのもって作られた世界だったのだ。そんな中でGMとしてイベントや何やらを企画して、成長していく世界を見るのがたまらなかった。まさに神の視点だ。

でも、世間と言う奴は厳しいもので、集客力に乏しいディープファンタジーはカネを稼げないタイトルだった。次回作を早急に出さねば我が社は潰れる。そんな感じで僕ともう一人をサーバー管理者（兼次回作開発）として駆け足で開発を行っていたのだが、外注先がポシャった。その穴埋めの為に社長やその他上の人は駆け回ったようだ、結局「夜逃げ」という最終手段をとらなければならなくなったようだ。つまり、僕は職場を失うハメになった、と言う奴だ。

実際に会社に行つて行う仕事は全部済ませてある。差し押さえを免れたのは既に賃貸料金を支払っていたゲームサーバーだけ。開発用のワークステーションやPC類は夜逃げの翌日に差し押さえが入った。私物のHDDに移してあった開発ツールやその他は細かいデータ類は自分の手元に残ったが、12月31日の24時でレンタルサーバーとの契約も切れる。

「八木さん、イベント準備できましたー！プレイヤー皆集まっていますヨー！」

センパイもお人よしだ。何も僕を追いかけて同じ会社に入ってるのもいいのに。

「センパイ、Pアカ（プライベートアカウントの意）の方で入ってるんですか。Gアカ（GMアカウントの意）でやってもいいですよ」
どちらにしてもこれはもう業務外といってもいいだろう。給料も貰えない上に、私物のノートPC2つで、コタツに入ってレンタルサーバーにログインしているこの状態ではGMというのもおこがましい。

「いやー、ウチも結構このゲームはプレイヤーとしてやりこみましたから、何だかんだで自分のキャラでやりたいんですよー」

コタツの向かい側のセンパイは笑いながら、イベントを楽しむつもりでいるようだ。まあ、それでもいいだろう。大晦日に無職二人でコタツ挟んでやることじゃないなあ、と苦笑しながら。GM八木太一としての最後の仕事を始めることにしよう、と。明日は正月だけど、ハロワって何時から開いてたっけと、取り止めも無い事を考えながら。

「じゃ、始めましょうか。ディープファンタジーのラストクエスト、邪神の封印を。」

そう、僕はまだGMだ。プレイヤーを楽しませる必要がある。少なくとも今日の23:59までは。

「神じゃなくて邪神ツスけどねー」

「うるさい、プレイヤーはどうなってるんですか。」

こんな合いの手も日常茶飯事だった。この掛け合いももう出来なくなるのかと思うと、多少寂しい物がある。

「ログイン数は…あ、ウチら合わせて丁度108人です。108なら煩惱の数っスねー」

予想より多くも無く、少なくも無く。なんだかんだでこの末期ゲームにもそれだけの愛好者がいた、という事か。

- これより、クエスト『邪神封印』を開始します。イベントに参加なさるユーザーの皆様は『絶望の迷宮』へお越してください。尚、このクエストは受諾制限はありません -

- また、これは運営チームからの最後の挑戦でもあります。お時間が許すならば皆様、どうかご参加ください -

ワールドチャット
お知らせを打ち込んで、時計を見る。20:00。ぴったりだ。まさにパーフェクト！最近は全部マクロ化してたから多少心配だったけども、取り越し苦労だった。

「それじゃ、邪神役おやくめしっかり果たして来てくださいッス」
センパイはそういつて、自分の分身キャラクターの操作に戻る。曰く、「最近のユーザーなんて我侂わがままつすから、最後のイベントなんだから全員参加してもらっッスよ」と言う事らしい。プレイヤー側として参加してくれるという事だそうだ。

遊びじゃねーんだMMOは！とか言うセンパイは、客離れを防ぐためにプライベートでキャラクターを作成して、色々やっていたらしい。本当にMMO好きなんだなあと僕は感心したものだ。

「ディープファンタジーは遊びじゃないんデスよ！」

僕にとっては最初から仕事だったけど。その一言で引き締まる気がした。そう、エンターテイメントを尽くしてこそ、GMだ。ゲームマスター

- また、これは運営チームからの最後の挑戦でもあります。お時間が許すならば皆様、どうかご参加ください - ラストクエスト

何だかんだでこの時が来たか、始まりがあれば終わりもある。

私はフレンドのヒゲダルマの「どうせ最後のイベントだ！派手にやろうぜ！」という言葉に乗せられて絶望の迷宮の前に立っていた。正しくは、チャカ。私じゃなくてチャカが絶望の迷宮の前に立っていた。

大学受験に失敗した私が、MMOに嵌って、さらにずるずると浪人を続けるハメになって、親に追い出されたのは決していい思い出ではない。

幸いにもイラストが趣味で、それなりの腕前があった私は、同人活動やプロのアシをしながら、なんとか食いつないでいる時に、気分転換とか、それこそ生き甲斐になってた位大事だったのがディープファンタジーだったと言うのも事実だと思う。そのぐらい嵌っていた。

男の尻を見ながらゲームするなんて趣味じゃないとか言っ
て、大体の奴らがどこのオーガだよ！と突っ込みを入れるような女キャラ
を作る中、私はものすごい美少女キャラを作った。むしろ美少女
本当に間違いなくド直球ロリータを目指して体现したのがこの私、
チャカだ。

流れるようなプラチナブロンド、病的なまでに白い肌、瞳は常に
濡れたような光沢を放つ深紅。女性的な起伏には乏しいが、その瑞
々しく伸びる四肢に張り付く肉の柔らかかさ等等。装備品の選定も、
ハードコアファンタジーという煽り文のディープファンタジー内
においても、所謂萌えと言うものを集め、組み合わせ、拘りという拘
りを持つて『場違いなまでに萌える』という私の手による造形物に、
「このロリコンが」「厨二病型ド変態もここまで来ると芸術的」「
アグ スーパーここだー！」「おまわりさんここです」等々
ギルメンにお褒めの言葉を貰った。

まさにロリ嗜好野郎の脳内妄想ここに至り、という非常にフェテ
イッシュな外見であり、4年間、正に常時鑑賞していても私のまた
ぐらはいきり立つ事が衰えない。私自身、常にネカマとしてロー
ルきってプレイしたが、これほどまでに執着したのもチャカだけだ。

正に俺の嫁である。

そんな私ことチャカの勇姿？を見る事も今日の24時まで。所持インベ
品欄ントリに今まで装備していた普段着魅せ装備を突っ込み、ダンジョン攻略用の
「一呪われた針の筵のローブ《ボンデージスツ》」や「ねじくれ
ドなタガ」レシエンを装備して、準備万端。隣にいるヒゲダルマに話しか
ける

「今までに何度も周回してきた絶望の迷宮だけども、なんかそこま
で違うのかなー？そりゃイベントって言うからには何かあるんだろ
うけどさ」

ヒゲダルマはムツキムキの筋肉達磨の両手斧を使うファイターだ。無精髭がモサモサで、一見鬼のように見えるが目はひどくやさしい目をしている。結構デフォルトの顔から弄っていたので、聞いた所、「好きな人の顔を作ったんだよ、マジカッキーだろ?」と言う回答だった。私のセンスとは多少一線を隔している。ヤツはきつとハードなゲイに違いない。

最後の1ヶ月間の無料キャンペーンが始まって数日でPTチャットやギルドチャットは使い物にならなくなった。

ヒゲダルマ事態はかなりの古参だ。私は正式版組だけど、ヤツはからやっていたらしい。

ギルドをふらふら渡り歩いていたり、暇な時に街で見かけたり、私とヒゲダルマの間に接点が無いわけではなかったけど、会話するきっかけが無かったのだ。それがこの最後の1ヶ月で親友と呼べる程度まで会話するようになったのは、毎週のメンテすら消え去ってPTチャットやギルドチャットが死んでから^{ぶっこわれて}。

全く皮肉な話で、PTやギルドという内緒話が出来るグループが無くなってからのほうが人と話す機会が増えた。確かに身内同士での会話は楽しい。楽しいが、新しい知人が増えなかったのも事実だ。MMOなんて人と人との交流が無いならひどく時代遅れのクソゲーだと私は思う。最後の1ヶ月の方が新しい友達^{フレンド}が増えた。

「俺の見立てによると、今ここには1000人集まってるだろ? 24時までの4時間イベントだ。普段1周2時間かかる絶望の迷宮で、移動時間が賞味1時間、戦闘時間が1時間: MOB量10倍ってところじゃないか?」

「そうだね、1000人かあ。結構過疎ゲーだったけど、居るもんだね。って10倍とか、さり気無く茶苦茶な事を言うねー」

1000人で挑むからMOB量10倍、でも、人数さえ居るなら十

分攻略可能なんだろう。その辺りのさじ加減に関しては、私はこの運営は信頼していた。厳しいけど、不可能じゃない。その絶妙ラインを見極める事は他ゲーの運営よりもよっぽど上手だった。

- 尚、今回のイベント中の『絶望の迷宮』内でのモンスター量は通常の約10倍になっています。皆様お気をつけ下さい。-

- また、迷宮最下層に存在する『邪神』は皆様全員の力に匹敵する力を備えています。どうか打ち倒し、封印し、この世界をお救い下さい。-

- それでは、皆様、御武運を-

おおおおおおおおおおお、と雑多なログが流れ、私たちは進軍する。予めPTを組んでおいてよかった。チャットは使えなくても、戦闘単位としてのPTはまだまだ有効。

「ヒゲさん、タイタンとナイトウとヤミカゼは？」

「あいつらはあそこ、ナイトウなんて前衛じゃないのに張り切ってるぜ」

「じゃ、最後の戦い、楽しませようか！」

先頭集団に追いつけ追い越せ、被弾をしてもいいように各種回復・弱体スキルで何を使うか、頭の片隅で考えつつ、おまっりに参加最前線組に合流した。

「うっはwwおkkkkk」

オレは「地獄の炎」の詠唱モーションに入りながらチャットを打つ。一昔前に流行った内藤語はトレードマーク。まあ別にナイトじゃないし黄金の鉄の塊な訳でもない。でも簡易なキャラ付けとして

は割と絶大である。それなりに見知らぬ人からも話しかけられるし、正直困った時にはw(草)を生やしておけばいい。楽だ。

正直いい歳して何やってるんだろうなあって素に戻った時は思うが、この口調も4年も続けば意地にもなる。だからオレは内藤語でフロント語の使い手でナイトウなのだ。

「今日も絶対調みたいですねナイトウさん！」

モニター
視界を360度ぐるりと回して、見知ったキャラを見つけて、ああこいつもやっぱり参加したかと。妙な感慨を抱く。

「うはwww変態幼女wwwktrwwwwww」

「だから」

「変態じゃ」

「ねえっつーの！」

いや、そこは否定できないだろ。少なくともこのゲームでそんなロリキャラ使いはお前だけだよ、と内心思う、この掛け合いも今日で終わりだ。

「食らえ必殺の減るファイアアアアア！1！！！」

無駄にハイテンションな台詞を打ち込みつつ、普段の10倍の量の「敵」に思う存分自分の最強スキルを叩き込む。4年、同じような事を繰り返しても今日は量が違う。刺激が一味、違う。

もう既に「見慣れた」エフェクト。だが、オブジェクトの設置の限界に挑むかの量のモンスターの群れと、エフェクトの量は膨大な熱量を発してグラフィックボードを苛む。グオオオオオンと普段より一回り激しい轟音はスピーカーから出たモンスターの悲鳴か、それとも自分のパソコンが上げる悲鳴か。

そんなくだらない事でも脳汁が^{アドレナリン}ダバダバ出る。多分全部終わった後、一人恥ずかしい思いをするんだろうが、それでもいい。

「んんん破壊力がっ牛うううん」

ンギモ、チイイイ！！

ああうん、オレはこの世界がすげえ、好きだ。終わるのが勿体無い。

「ナイトウ、スマン。打ち漏らし3ぐらい行くわ」

重装甲、剣と盾をガッチリ構えて敵の群れを抑えていた戦士が「盾強打」の合間にチャットをぶち込む。Oh Shit!

「オイイ!? タアアアイトアアアンーー!?」

冷静にバックステップを踏みながら、バラバラに襲い掛かってくるAIの化け物を「凍て付く吐息」で巻き込む。与ダメはそれほどでもないが、相手の行動速度を極めて鈍化する、射程以外はそれなりに優秀なスキルだ。「凍て付く吐息」で迎撃、間合いを取った後に6本腕の化け物達を襲ったのは「腐れ落ちる水」だった。

ドロリとした粘性のある液体に包まれ、見る見るうちに腐れ落ちるモンスターの肉と骨。そこに残るのは汚らしい泥水のみ。

「最後までいいキツチリしめてよね!」

フロローはありがたいが、うつせえ腐れ少女。中の人はどうだか知らんが。

「汚いなさすが死霊使い汚い」

4年も似たような事をしていたが、今日は流石に「別格」だ。

22:43 土曜日 20XX/12/31。GMキャラクター

で透明化しつつプレイヤー動向を観察していた僕は、時間を確認して多少悩む。

「うーん…」

先頭集団の進み具合から邪神の間にたどり着くまでに後20分ほ

どかかる、と大体予測してモニターから目を離し、ゆるくなったコーヒーを飲む。

大体予定してた時間から凡そ30分ほど遅れている。このままだと僕を倒して大団円、その後のロスタイムでトークタイム、という当初のシナリオから外れてしまう。どうしよう。

「八木さん、邪神倒してゲームが終わりって最高にカッコイイじゃないっすか！それで行きましようよ！」

センパイが僕の顔を見て割り込んだ。いつの間にか独り言になってた。ああ、その終わり方も確かに「カッコイイ」

「そうだなあ。それもいいかもしれない、か」

予定通りに事が運ばないのもいつも通りの話で、いつもそうだった話で。メンテを完全にサボって居た鯖が（一部機能がマヒしている以外）問題なく動いているのも正直予定外だった訳で。ギルドチャットやパーティーチャットが死んで居るおかげかそれとも、108人しかログインしてないせいかな、普段より軽い位だ。

「じゃ、センパイ。そのままプレイヤー盛り上げながらお願いします。僕は邪神キャラの方に入るんで」

「はい。邪神っプリをしっかりと発揮してくださいッス」

邪神っプリってなんだ。一応台本は書いて来たけど、作家という訳じゃないから拙いものだ。ただ、この拙いシナリオでも喜んでプレイしてくれたお客様の皆様には幾ら感謝してもしたりない。

そして僕は『邪神』になる。

「回復たのんます！マスター！」

「そのまま。回復ディレイが終わる5秒後まで待て。その後復帰、
「足払い」を入れる。その後カウンターに入る。あと少しだ。行くぞ！」

全身を豪華に輝く伝説級の装備に身に包み、その装備に負けぬほどの尊大な雰囲気醸し出すその修道者は、最前線の真っ只中にいても埋没しなかった。

その装備を良く見ると、ただの伝説級装備と言う訳ではない。限界中の限界まで鍛え上げられ、理論上最高の性能を誇っている。どれだけの時間を注いだのか。注いでもここまで揃えられるのは一握りの幸運に愛された者だけだろう。そう、自分のような。

「マスター、もうすぐ邪神の間です。」

「ああそうだ、10倍と言ってもたいした事無かったな。」

2年前BOTerとして晒された。四六時中狂ったようにレベルアップをしていたからだ。俺は悔しくてギルドを作った。1年掛けて誤解を解いた。誤解を解いた後RMterとして晒された。ギルドメンバーと狂ったように出した装備をRMTの結果で揃えた、らしい。世間と言う物はひどく無責任で、邪悪だ。誤解は解けなかった。ゲームに飽きたのか、それとも自分と一緒に居る事に飽きたのか。200人居たギルドメンバーはどんどん減った。

ギルドに残って、ログインし続けたのは40人。よく残った。本当に。本当に精鋭だ。

今のディープファンタジーでは、アクティブが40人も居るギルド、というのはそれだけでも大手だ。なんだか2年掛けてようやくこのゲームでトップに躍り出た気分になった。最強だった。

そう一息ついた時に、このゲームが終わるといふ告知が出た。マジ泣きした後、怒りがこみ上げた。誰にぶつけられる怒りでもない事は百も承知している。

何でこのゲームが終わらなきゃならないんだ。こんなに楽しいのに、自分のこの怒りがどこに伝わる訳でもないのが更に腹立たしい。単なる大学生であるこの身が口惜しい。もっと力と金があれば。もし10年産まれてくるのが早く、社会的に成功していたら。もし、と仮定しまくった。無意味だった。怒りは更に募るばかりだった。

そして、今、この場に立っている。いつものギルドハンティングの延長のつもりで立っている。もしかしたら、普段どおりにしていたら続くのではないかと妄想しながら。ギルドマスターの、仕切り屋としての役割を果たしている。

「そろそろボスか…行くぞ！」

「神の祝福」「守護者」「盾よ」を発動させつつ、ギルド全体だけではなく、部外者^{P.T外}の面子のHPも計算する。100人単位のHPを管理するのもまだ戦争がコンテンツとして成り立っていた時以来だ。

懐かしさだけじゃない、まだ見ぬ「邪神」を狩る為に。まだ見ぬ強者を狩る為に。自分の血が沸き立っていくのが判った。

- 騒がしいな。我が愛し子達よ…。 -

画面をこれでもかと揺らしながら、先陣を切った自分達のギルドの前に立ちふさがったのは、正に「邪神」だ。

邪神は禍々しくも神々しい巨大な体躯、ぬめる様な光沢を放つ肌、

6対の腕と2対の脚を持ち、無数の武器をがしやりがしやりと揺らしていかにもな雰囲気醸し出していた。これがせめて1年前に導入されていれば…ああ糞ッ！

・ククク…フハ、ハハハハ。そういうことか。我を封じる心算か…
・その過ちごと存分に愛してやろう…ゆくぞ…

「邪神」のそのワールドチャットを皮切りに、自分・ウッドベル率いる、ギルド「レゾナンスペイン」は総力を挙げて神殺しの「作業」を開始した。

今年のイヴは散々だった。金土日、リア充するつもりが、一人さびしくシングルベルとか意味不明な道化を演じたのは俺だ。

1年前の黒歴史のネトゲ充から脱却してようやく彼女が出来た。本気で彼女に尽した。なんだか判らないが別れ話を切り出された。「えっ」とか素で言ったのは久しぶりだった。

「引退するわ、俺、リア充になるからよ」と言って辞めたディーブファンタジーが、終わるといふ話をチャカからスカイプで聞いたのは二ヶ月前だ。熱中してた時は仕事から帰る、ログインする、ゲームする、寝る。その繰り返しだった頃の仲間だ。アイツまだやってたのか。「気が向いたらログインするよ」と適当な生返事を返したが、その時はこんなことになるとは思わなかったのだ。

24日の23:59。久しぶりに起動したディーブファンタジーのアップデートが終わり、ログインして、ギルドメンバーリストを

見る。生存者は4人。俺ことタイタン、変態、逆毛、ネクラの4人がいた。「こんばんは」とギルドチャットで何度打っても返事が無い。あー、俺お呼びでない？と、更に陰鬱な気分になった時だった。

「久しぶり、元気してた？」

「おひさwwwwokwwww」

「ちっす」

オープンチャット
白チャットの発言と、懐かしい奴らのアバターが走り寄ってくるのが見えたのだ。なんだか涙が出て止まらなかった。

「リア汁の癖になまいきにも24日にログインするとかwwwwありえねwwww」

「あ、もうギル茶死んで使えないから、オープンでお願いね。」

「所詮は同類」

こいつらひでえよ。俺失恋中だよ。何考えてるんだ糞が。お前らも同類じゃねえか。色々文句もつけなくなった、だけど、涙で滲む俺がとっさに打てたチャットは一つだけだった。

「ただいま」

とだけしか打てなかった。

復帰した俺は、49だったLVを50に上げようと決意した。3日に終わるデイープファンタジーで心残りだった事といえばこの程度だ。仕事、ログイン、寝る、仕事、ログイン、寝る。28日の仕事収めの後の飲み会も断った。後はログイン・寝る・ログイン・寝る・ログイン・寝る・ログイン・寝る・ログイン。どこのペットポトラーなの、死ぬの？とチャカに心配されたが、それもたいした事じゃない。最優

先事項は50LVになって最後のイベントに参加して、心置きなく、正に満足して辞める為だ。おかげで31日の夕方には50達成、装備品も奴らギルメンに負けず劣らずの壮観な物になった。1年のブランクはゲーム内部の知識に虫食い穴を開けまくったが、データだけなら結構いけてる状態だ。

P i P i P i P i P i ! P i P i P i P i P i !

クエスト途中からメールが何通か届いていたが、俺は邪神封印のラストバトルの最中に携帯を取って見る気にはならなかった。煩い。さつきから何通届いてるんだ？まあ後で見ればいいか、と放置をしていたのだが、流石にうっとおしくなった。

携帯を見て、冷や汗がびっしりと出た。

1 2 / 3 1 みわ

お願い

1 2 / 3 1 みわ

やりなおしたいの

1 2 / 3 1 みわ

届いてない？

1 2 / 3 1 みわ

ごめんなさい、お願いゆるして

1 2 / 3 1 みわ

ごめんなさい

1 2 / 3 1 みわ

返事してください

1 2 / 3 1 みわ

やりなおしたいの

ずらりと並んだ『彼女』からのメール。どうしてだ!? 振ったのお前じゃないか!? どうしてだ?! 一体どういうことだよ…。おい、誰か答えてくれよ。

思考がフリーズする。震える手でメールを開こうとして、マウスにおきっぱなしの右手が無意識にダブルクリックをした時。

俺の意識は暗転した。

- その過ちごと存分に愛してやるっ… ゆくぞ… -

僕はすかさず「王者の咆哮」「呪い・邪神」「猛毒の瘴気」を発動、先制パンチを与えてヒーラーの出番を作る。同時に邪神としての一步を踏み出す。ズギャリッ、ズギャリッと金属質な異音を立てながら、「王者の咆哮」の開放タイミングを計る。

プレイヤー
愛し子達こどもたちが僕から立ち上るオーラに気圧されたように間合いを取る。有効範囲に居るプレイヤーは44人、今だ。

GURUUUUUUUUUUUUUUUUUUUU!

統制の取れたギルドの一団は、重装甲の戦士を盾役おしろいにするつもり

か、彼一人を残し一斉に下がる。ギリギリ範囲を掠めるように撃つたせいで、思った数のプレイヤーを巻き込むことは出来なかった。

「ちょｗｗｗｗｗｗｗｗ吹き飛ばしｗｗｗｗｗｗｗｗしかも超ダメージｗｗｗｗ」

「ちょ、何で一気に下がるの?!」

「咆哮範囲は50m、魔法使いでも即死は無い。立て直したら行くぞ」

「メディーック!メディーック!」

「ガードは可能だぞ!いける!」

皆が協力して遊んでくれている。本当に嬉しい。

「連続振り下ろし」を盾役の戦士に叩き付け、毒のオーラで背後を取ろうとした暗殺者を絡めとり、後ろで回復に専念している修道者らを呪い、骨の戦士を絶え間なく送り込んでくる死霊使いに「地獄の炎」をたたきつける。

整列し、弓を装備した戦士達の一斉射撃が僕の体邪神に突き刺さり、よろめきモーションを発生させる。

一瞬の間を突いて、20人近くの魔法使いらが雪崩の様に投げかける魔法の一つが抵抗レジストを突破した。

10秒間完全に移動を拘束する、「足よ萎えろ」だ。

丁度「突進」を使おうとした直後なので、僕の攻撃はからぶる。足が止まった邪神に、長時間の詠唱モーションがネックの「死竜の火炎」が浴びせかけられる。骨で出来た巨大な竜が召還され、そのブレスが僕を邪神焼く。ダメージ。状態異常・燃焼が付加される。

斧を構えた戦士が果敢に「重撃」を発動して6本ある右腕に攻撃をかけ、グシャリとへし折り、攻撃力が一時的に50%ほど減少す

る。暗殺者が背後から「捨て身の一撃」を加える。「死に至る毒」も追加で発動し、DOTダメージが追加された。側面からは両手持ちの大剣を装備した戦士が「唐竹割」を使い、脳天から一気に叩き切る。必殺の大技で、かなりのHPがこそぎ取られる。

「流石に数が多いとレジスト抜かれてあっさり気味かなあ・・・もうちょっと硬くても良かったかな？」

「八木さん、流石にカタ過ぎっす。結構ギリギリですよプレイヤー！側も・・・っ」と

僕の左腕がそれぞれ異なる6人の対象を選択し、暴風雨のような連続攻撃をかける。ガードを解いた正面の盾戦士を吹き飛ばし、「重撃」を叩き込んできた斧戦士に致命打を与えたのはいいが、残りの攻撃はタイミングを見計らった「守護者」により軽減され、「盾よ」によって弾かれ、通った攻撃も「癒しの光」「慈悲の輪」により即時に回復をされる。凄い。まるで通信パケットを読んで行動されているかのような回復だ。

「アッー！」

「あー、やっぱりアレセンパイでしたか…。」

邪神僕のHPは徐々に磨り減り、予定調和23:59の時刻を演出すべく行動を開始する。今までにまして苛烈な攻撃スキルと邪神僕の高い攻撃力は最高LVの勇者たちを戦闘不能に何度も追い込んだが、その度に適切な蘇生スキルによって何度でも立ち上がってくる。そろそろ頃合だ。大技で全員のHPを削って演出しようじゃないか。

- 何故だ、何故死を恐れず立ち向かってくる！ -

6対の両腕に持つ武器を大地に叩き付け、「怒れる大地」を発動させる。大地を揺るがすようなエフェクトと轟音。残HPはもうドット単位だ。23:59、後一撃！入れてくれ！

「アッー！」

「センパイ…また逝きましたか…」

「怒れる大地」によって減少したHPを自己治癒スキルの「血を肉に」で回復する。

死霊使い、という職はデバッファー兼ヒーラー兼遠距離火力職、という変則職。それだけを聞いていると万能のバランスブレイカーに聞こえるけども、死霊使いのスキルには厄介な使用制限として、マナポイントMPと同時にHPも消耗するという縛りがある。

そのHP消耗も単純なHPの消耗ではなく、ダメージ直後のHPの減少でも代用できるという一癖ある使い勝手。

「後ちよつとだーねえ」

「美味なる果肉」を発動させながら、邪神の攻撃で吹き飛ばされ、HPを大量に削られた盾戦士タイタンに接触する。接触した味方の状態異常を回復し、更にHPを回復させ続ける、だけど、回復させている最中は自分のHPが減り続けるという使い勝手が悪いスキル。だけど、他のスキルで遠距離回復するとなると、一定時間の持続回復HOTの後に再び持続ダメージを受ける状態異常を付加する「異常再生」や近くに死体が無いと使えない「死者の泉」等、今の状態じゃ使えないものしかなかった。

「タイタン、ちょ、反応ないし！ちよつと！」

減少したHPを回復しきっても反応が無い。早く「邪神」に攻撃入れてくれないと私が攻撃対象になる恐れもあった。焦り。時間を確認すると23:59。えっ、とと思って「邪神」を見ると残HPはほんのわずか。目の前に迫る邪神。

「ちよおおおおお？！」

最後のクエストで失敗とかちよつとこれは無いでしょ！タイタンの阿呆！と私は脳内で叫びつつ周りを^{モニターを回転させる}見渡す。

180度。丁度真後ろを向いた時、唐突にブン、ブンと、今までの^{フルスキル}手馴れた戦い方とは異なる、全くの素人じみた、まるでマウスをダブルクリックしたかのような通常攻撃の音が響く。

360度真正面を向いた時、それはやっぱり、タイタンが二回通常攻撃を振った音だった事を理解する。それが、邪神に命中したのを確認した時。

私の意識は暗転した。

23:59:59	土曜日	20XX/12/31	24:00
0:00	土曜日	20XX/12/31	

その剣は僕の体を十字に引き裂いた。
HPを示すバーは全くの0となった。
邪神は封印される。

直後、停電が起きたようだ。安い賃貸マンションの、日当たりがあまりよくない自室。夜は明かりをつけないと本当に何も見えないぐらい真っ暗になるから困った物だ。

UPSが上手く働いていないのか、モニターの明かりもPCのディスプレイも全く見えない。安物を買ったのが悪かったか、と後悔をして、電源が切れたコタツから出ながら、センパイに声をかける。

「センパイ、ちょっとブレーカー上げてきます」
つもりだった。

あれ、
声が。
でない。

体が。
動かない。

おかしいな。なんだか、すごく、からだか、いたい。ねむい。つらい。くるし……。い。

第二話 目覚めたら英雄

寝覚めは最悪であった。

寝落ちした時の、脳みそだけ休まった時よりもひどい、無理な体勢で寝た時の全身の痛み。まるで岩の上で寝たかのような感覚。薄暗い部屋。新年だというのにこの惨状は本当に駄目過ぎる。昨晩は何だっけ。ディープファンタジーの最終日イベントに参加して、ボ^邪ス^神を…倒して？倒した？その後どうしたんだっけ。いつの間寝たんだっけ。

ぼんやりと上半身を起こし、周りを見渡す。見慣れない部屋、どころか、見慣れない空間であった。見慣れた空間でもあった。混乱する。

私はまだ夢を見ているのかなあ、最近あんまり寝てなかったからねえアハハ。どうして巨大な人間の顔を持った、6対の腕と2対の足を持った化け物の死体が私の目の前に存在しているのか。

頭が重い。最近短髪にしたばかりのはずの私の頭から白い毛が大量に垂れ下っている。邪魔だ、と思って頭を振って振り落とそうとする。ぶるんぶるんと頭の動きに追従するように動く毛。ずいぶんとしつこい邪魔者だ。

私の周りで倒れていた人間達がうめき声を上げながら、だんだんと起き上がってくる。何この人たち超ビッグメンなんですけど。

「おい、これどうなってるんだよお!？」

ヒステリックな男の叫び声が響き渡った。その大声でようやく脳みそが完全に覚醒し、状況を把握する。

「何、これ」

私の声は、普通の野太い、私の地声ではなく。常々妄想していたチャカの声と全く同一な、綺麗なソプラノヴォイスであった。

手を見る。見慣れた私の、右手中指第一関節にガツチリと刻まれたペンだこと、右手首付け根に刻まれた分厚いマウスだことは無縁な小さな手。病的にまで真っ白で、滑らかな肌を持つ小さな手が見えた。

頭を掻き毟る。乱暴に扱ったせいか、数本の毛が抜ける。指に絡まる毛は、白金プラチナフロンの髪の毛だった。

体を見る。締め付けるかのように鎖と針をあしらった、豪華なノースリーブのローブを身に着けた、チャカの体。

モニターでずっと眺めていた姿が、そこにあった。

もしこれが夢でないなら、悪夢の始まりなんだと思う。

私は悲鳴を上げた。

「え、あああああああああああああああああああああ！
？」

酷く透き通った悲鳴が響き渡り、脳にうつすらとかかっていた霧のようなものが取り払われた。

全身を苛む打撲痛と、どこで作ったか分からない無数の切り傷と擦過傷。一切を無視してオレは飛び上がった。一自宅警備業を営んでいる《NEETな》オレだが、かつては警備員として勤務していた事がある。施設警備業務検定2級、数少ないオレの持っている資格だ。警備員時代を思い出し、最近不精で走ると息切れをする体に

鞭を打って悲鳴の発生源に駆け寄った。異様に体が軽い。いつの間
にオレはゾロゾロした服を着ていたのだろうか。知らん。カチャカ
チャと腰のバッグから瓶の音がする。知らん。

こんもりと山の様な何かの陰にその天使はへたりこんでいた。

天使の足元には倒れた若い金髪の鎧武者が居た。ずいぶんガタイ
がいい兄ちゃんだなあ、と思う。まるで天使と勇者じゃねーか。ず
いぶんなコスプレ野郎だが、リア充か？いやそうじゃねーよ。11
0番？119番？とりあえず声をかけねば。

「あ、あの、だ、大丈夫ですツカ。」

結構長い間他人としゃべってないせいで、どもる。思わず恥ずか
しくなつて横を向く。

横を向くべきじゃなかった。

そこには、頭蓋を叩き割られて、デロリとした、中からハミ出て
はいけないものが出ている巨大な、1mほどもある人の顔が存在し
ていた。

目玉が半ば飛び出し、舌がだらしなく開かれた口からよろりと
垂れ、鋭く伸びて尖った犬歯は片方のみ。真っ赤な血がぼたぼたと
垂れ落ちるその様を見たとき、俺は、情けなくも。

「ギヤアアアアアアアアア！」

情けなくも、オレは誰よりも大きな悲鳴を上げた。

他人がパニックになっていると冷静になれる、という話がある。一種の現実逃避なのだろうか？詳しくは知らない。だけど、私が悲鳴をあげた後に、大丈夫ですか、と走りよって来た、怪我だらけの大男が更にものすごい悲鳴をあげ、その大男の視線の先を見て私も更に悲鳴をあげて、二人とも更なるパニックに陥ったので、それは万人に当てはまる話じゃないと思う。

あんまりな惨状の化け物の死体の視覚的インパクトの後に襲ってきたのは、物凄い血の匂い。焼け焦げたたんぱく質の匂いと、ドブ川の腐ったような匂い。ツウンと来る尖った酸の匂いや、鶏を解剖したときの、腸を間違って破った時の匂い。それらがミックスされた物凄い悪臭だった。

「うぶつ、お、げええええ」

喉元にせり上がってきた胃液を抑えることが出来ずにビシャビシヤと吐く。胃液しか出なかった。出なかったが胃液が無くなるまで吐いた。横の大男もゲロゲロと吐いていた。

吐くだけ吐いたら落ち着いた。横の大男はまだ吐いていた。

「あの、大丈夫ですか？」

そもそもこの台詞は私が言わなきゃいけないはずの台詞で、それを言わなければいけない程度にこの大男は怪我をしている。背中をさすりながら尋ねた。物凄い切傷と擦り傷が全身にあり、見た目にも痛そう、確実に痛いであろう。

「あ、う、あ、うん、大丈夫、お嬢ちゃんこそ大丈夫かい。二ホンゴハナセマスカ？」

目の前の大男もまるで日本人には見えないが、日本語をしゃべれるなら意思疎通に問題ないだろう。多少どもっているのでハーフか何かだろう、と無理やり思うことにした。

「はい、大丈夫です、多分なんともありません。大丈夫です。」

なんともないわけがない。何でこんな格好をして、こんな状況に陥っているのか誰か説明してほしい。でも目の前に怪我人が居て、気遣ってくれているのだ、この際多少のことは飲み込むことにしようと思う。大丈夫、多分夢だ。悪夢かもしれないけど。それでもそれなりにまともな対応を取っておかないと。万が一の為に。いや、万が一と言ったが、嫌な予感しかない。物凄い悪夢の予感しかない。

「あの、すみません、本当に済みません。あなたのお名前は、何ですか？」

墓穴をほらずんば墓地を得ず、という名言は無いけど、その心境。

オレの人生に春が来たかも知れない。目の前の女の子はゲロまみれだが極めて天使だ。いや、オレもかなりゲロまみれだけど、女つケのない人生、大学で話しかけたら汚物呼ばわり、ストーカー呼ばわり。社会に出たら男まみれの職場しか経験したことないオレですが、ここで一発女の子の友達を作ってリア充にステッポうpするしかない。いや、ここマジでどこか判らないけども。なんか体中怪我まみれだけど。ブロント様もこういつていたではないか。お前それでいいのか？と。いや良くない。どちらかという大反対。ここで

チャンスを物にしないとオレの人生がブラックカラーなのは確定的に明らか。

「伊藤史郎！30歳！前職では警備員をしていました！体の丈夫さには自信があります！」

面接の時の経験を生かしてハツキリと、にこやかに。出来る限りのスマイルを維持して、こうだっ！問題ない！面接の時の為だけに鍛えた自己紹介だ！

「あ、いえ、そうじゃなくて。」

ものすごくかわいい
天使のお譲ちゃんに一発で駄目出しされた。しにたい。

「あの、私の頭がおかしいと思うかも知れませんが、聞いてください」

不安な顔をしているこの子は、一体何を言い出すのだろう。いや、頭がおかしいのはオレのほうであることは間違いない。オレは場違いでいきなり面接バージヨンの自己紹介をし始める、とか極まった変人じゃないか。

「もしかして、ナイトウさん…じゃないですか？あの、マジックナイトウさんじゃないですか？」

この天使いきなり何を言い出すのか。オレのディープファンタジのプレイヤーネームをいきなり言い出すとか何者だ。

いや、もしかして、ちよつとまてよ。オレ、確か、そういえば、何か大切な事を忘れてるんじゃないだろうか。確か、その、うん、いや、認めたくは無い。ないが、こう、あれだ。アレだよ。確か日付けが変わるまでオレはPCの前でディープファンタジーしてた訳で。ギルメンのタイタンが邪神にLAたてをもちたせんしを入れた所までは記憶している。その横にチャカへんたいようじよが居たのも覚えている。その時のオレのHPは

それなりに減っていた。それなりだが回復魔法が必要な程度じゃない。つまり…もしかして、その。いや、30にもなつてこんな妄想を口にするのははばかられる。非常識過ぎる。いや、しかし。

よく見たら、あの時の装備と状況と、一致している。モニターの中よりも圧倒的な存在存在感を放っていたけれども。

「もっ、もしかして、君、チャカ？」

チャカは今にも泣きそうな顔をして、頷いた。オレはまたもつた。しにたい。

目が覚めたらそこは戦場であつた。

「うう…イテエよ…」

「痛いよ…おかーさん…」

「…っぐう」

目の前に何人も倒れていたのは、多種多様の呻き声をあげて全身で苦痛を表現する、煌びやかな鎧をまとつた戦士達。

自分も体に多少の痛みを抱えていた、小指を箆筩に打ちつけたような痛みがそこかしこから感じる。

周りを改めて見渡す。邪悪な気配漂うドーム状の大広間。明かりが少なく、薄ら暗い。周囲の松明のような物で照らされる足元は岩盤上の何かで出来ており、ヌルつとした質感を保っている。

数瞬、茫然自失となる。立ちくらみそうになるのを堪え、自分の

姿を確認する。着ていた物は毎日見ていた、金色の豪華な刺繍を悪趣味なまでに入れ、中に鎖帷子を仕込んだ修道服。腰には聖櫃な輝きを湛え、邪悪を打ち払う神聖な気配を漂わす戦棍^{メイイス}。背中に背負った丸盾も美術品かと思われるような彫刻が施されていることだろう。
ラウンドシールド

唐突に気がつく。これは、自分が望んだ世界なのだと。
何を為すべきか？当然だ、決まっている。傷ついたものには癒しを。それが修道者だ。

自分なら、出来る。全能感が体を巡る。力が漲っている。

「『癒しの光』よ…癒せ…！」
ディーブファンタジー
このゲームを始めてから、それこそ数えるのが馬鹿らしくなるほど使用した修道者の基本中の基本スキル。使い方は体が覚えている。そう、たとえキーボードが無くて。マウスが無くて。そう。こんな風に。

目の前に転がっていたギルドメンバーの戦士を目標とする。
両足が妙な方向に捻じ曲がり、骨が露出していた。恐らくは「怒れる大地」の回避に失敗し、回復の為に後退していたのだろう。失血の為か顔面を蒼白にし、息も絶え絶えだ。右手に集まった光が、戦士を包みこむと、飛び出た骨は元の形に戻り、捻じ曲がっていた足が見る間に整復される。蒼白だった顔色に血色が戻り、呼吸も安定を取りもどす。
耐え難い痛みが見る間に和らぎ、意味のある言葉を発する余裕すら出る。

高速逆回しをした動画を見ているような、非現実的で神秘的な光景。

「え。マ、マスター…一体？」

一命を取り留めた戦士が、まるで神に出会ったような、そんな惚けた顔をしていた。そうか、自分の顔は『ベルウッド』で通じる顔なのか。

「回復薬は持っているか。」

「えっ」

「回復薬だ。腰のポーチに入っているだろう。」

半分以上の確信と共に、癒された戦士の顔を覗き込み、力強く断言する。

「あ、はいっ！」

急いで正座して、腰のポーチをまさぐっている副官サブマスを後に残し、次の対象へと移動する。

「見つけたらギルドの負傷者に飲ませるんだ。急げ。自分は重篤者を癒す。」

「はいっ！」

「た、多分、怪我とかは無いから。頭打ってたりとか、な、内臓とかやってたら判んねーけど。」

「うん、そう…だよな？大丈夫だよな？」

一人暮らしの俺の部屋に、誰か侵入したのだろうか。2人組みの聞き覚えの無い声がある。

「おいイ、た、タイタン、め、目覚ませー」

「タイタン、タイタン、起きて！起きて！」

ぺちぺち、と頬を叩かれる。ああ糞、誰だよ。泥棒か？鍵閉めてたはずだよな…と思考が多少回る。思い出す。みわちゃん！携帯！

「みわちゃんッ！」

「うごおつ?!」「ぎやつ?!」

勢い良く飛び起きた俺の目に入ってきたのは、珍妙な服を着込んだ凸凹の2人組みだった。一体何だこいつ等。そんな事よりも携帯が！携帯が！

左手に持っていたはずの携帯が、何故か馬鹿でかい盾に変わっていた。

何故俺は自分の部屋に居ない？何故俺は盾を持っている。まさか誘拐？二十歳を超えたい男を誘拐してなんになる。しかも盾を持たせる意味はどこにある？新手的コスプレ誘拐団？さらって来た相手をコスプレさせて撮影して、それをネタにゆすり続ける？そんな馬鹿な事は誰もやらないだろう。どこに需要があるというのか。睡眠不足の脳は訳のわからない思考を加速させ、一通り暴走した後にとりあえずの結論を下す。まずは携帯だ。

「あのー…、すみませんが、俺の携帯知りませんか？」

とりあえず手近に居る二人組みに尋ねる事にした。跳ね起きた時に二人組を弾き飛ばしてしまったのか、男は顔を抑えてのたうちまわり、少女は尻餅をついていた。

『知るかヴオケエ!!』

片方は鼻血を押さえながら、もう一方は尻餅をつきながらの違いはあるが、同じ台詞で俺に怒鳴りかかったのだ。

自分のギルドメンバーを探し、癒し、指示を与える。恐らくここは自分の思っている通りの場所だろう。確証を得る為に更に動く。全身に力が漲るような感覚は続いている。『神の祝福』の効果は30分。最後にかけたのは23:33分時点。残り時間は3分、逆算して72分。まだ時間的余裕はある。ギルドメンバーは残り数名。深刻な負傷を負っている者ももう居ないはずだ。

「おい、これどうなってるんだよ!？」

「とりあえず落ち着け!いいから!な?」

パニックに陥った魔法使いと大剣を持った戦士が言い争っている。戦士はなだめようとしているようだ。どちらも自分のギルドメンバーに相違ない。鉄拳制裁を加える事にする。

魔法使いを殴り倒す。ゴリツと骨に響く音を感じた後、返す拳で大剣使いの顎を捉える裏拳を放ち、脳を揺さぶる。片膝をつく大剣使い。

「おま、一体誰だよ!いきなり何しやがる!」

殴りつけた直後に、「慈悲の輪」を発動。自分が拳で与えた程度の負傷にはもつたいない

が、こうでもしないと落ち着かないだろう。一種のショック療法だ。神秘的な、重力に逆らうほどの白い円状の光が大地から放出される中、自分がこうありたいと願う姿で断言する。

「判らんか、自分だ。ベルウッドだ。」

「何これ?」「え、あ、マスター?」

自分の予感、いや、もはや確信といってもいい。それに従い言葉を選ぶ。正しかった場合は現状、自分たちは物凄く危険な状況におかれている。短期的にも。長期間的にも。

「いいか、良く聞け。混乱しているかも知れんが、お前らはサブマスと合流してここに居る全員を集めるんだ。いいな？」

「あ、え、お、おう、判った。」

「お、オツケー。」

「行け、出来る限り急ぐんだ。話を聞かん奴らは無視してもいい。自分はギルド外の負傷者の救護に回る。異常が何か少しでもあればすぐに報告しろ、いいな？」

頷き、慌てて走り出した魔法使いと戦士を見送った後、全身に漲る全能感が抜け去る。この間、目覚めてから約70分。

予感が確信に変わった時、少女の悲鳴が聞こえた。

心配していたのにヘッドバットを食らうとか酷い話だと思う。目の前の事で手一杯なのは私も同じなのに、みわちゃん！携帯ガー！とか言い出すタイタンは酷い奴。誰だよみわちゃん。この前つられたとか言う彼女か何か知らないけど、そんな事を言い出す状況じゃないでしょ全く、という感じで、私がチャカで、大男がナイトウだということの説明した。

タイタンの顔が、何言ってるんだこいつ、頭おかしいんじゃないかこいつ等、という表情をありありとしていたので、吐瀉物ゲロまみが飛び跳ねたローブに不快感を覚えながら必死で説明していた私は、苛立ちが隠せなかった。きちゃない。でも、我慢するしかない。でも不快なものは不快で仕方が無い。その時、第三者の声が割り込んだ。

「取り込み中済まないが、少々宜しいか？」

威圧的な雰囲気を放つ、支配者がそこに居た。

「どちら様でしょうか？」

冷えた声でタイタンが立ち上がりながら答える。基本的に「うはwwwwwwww」で会話が成り立たないナイトウヤ、会話事態を避ける節があるヤミカゼ。うちのギルドはどうしてこう、イロモノ揃いなんだろうか。この手の交渉事があると、今は亡きマスター以外で狩り出されたのはタイタンか私のどちらかだった。タイタンが休止の間は私が全部行っていたけれども。

「失礼。自分はベルウッドと申します。」

「どうもご丁寧。俺はタイタン。」

名前を聞いて、タイタンの声が更に硬化する。ゲーム内でも引きこもり気味だった私でも知っている、有名なBOTer兼RMTe r兼、大人数ギルドのマスター、ベルウッド。最も全部根も葉もない噂、という話だが。

「貴方がPTのリーダー、で宜しいか？」

「PTがどうかは判らんが、アンタと話してるのは俺だ。」

更に硬い声。この状況で一体何を言い出すのか。威圧的な空気に飲まれそうで、心臓が早鐘を打つ。子供の身長となった私だと、二人とも物凄い圧迫感だ。

「其方のPTに怪我人等は居ないか？」

「は？」

タイタンの間の抜けた声。苛立ちを増すベルウッド氏の声。

「ああ糞ッ。状況がまだ把握できていないのか！いいから質問に答えろ、「怪我人」はここに居ないか！」

「マスター！人員把握と怪我人治療ほぼ終わりました！」

そこに銀の全身鎧を着込んだ戦士が駆け込んで来て、ベルウッド氏に話しかける。

「総人員97名中、死亡者1人です！他は全員回復薬で何とかなりました！」

「ここに3人、総人員100人。生存者全員を一箇所に集めておけ。話がある。」

「はいっ！」

「後、死人も集合場所に運べ。蘇生させる。」

「ラジャ！」

置いてけぼりな私たちに振り返り、ベルウッド氏が言い残す。

「腰のポーチだ、回復薬POTぐらい持ってきたらどう？」

第三話 復活するから英雄

「マスター、つまり、ボクらはディープファンタジーの中に居る、と」

「あくまで推測だ。」

集合場所に向かいながら銀の戦士サンマスに推論を述べる。ここはディープファンタジーの世界内部、『絶望の迷宮』の最下層部。自分達はゲームのキャラになってしまった、と。

「じゃあ、深い事考えなくてもいいんじゃないですか？ボク達最強じゃないですか。」

「そうだな。だが、最強だからこそ、考えなきゃいけない事もある。」

溜息をつきたくなる。しかし、溜息をついている場合じゃない。モンスターMOBを倒す能力だけで生きていけるのは、それこそMMO時代のディープファンタジーの時だけだ。

「50LVとか、超強いじゃないですか！装備もスキルも最強ですよ！」

「じゃあ、お前、食事と水抜きでどこまで生きれるか挑戦してみるか？」

それもいいだろう。実際にどこまでやれるか調べなければならぬ部分だ。志願者がやるなら一番いい。大体食料も水も、無い。

「え、マスター、目がマジですよ、ちょ、待って下さい。簡便してくださいよお。」

「ああ、割と本気だ。お前がやらなきゃ自分がやる。『餓え』と『渴き』にどこまで耐えられるか。だいぶ切実な問題だ。」

「知っているか？人間は水を飲まなきゃ3日でくたばる事を。」

人間が水分を取らずに生存できるのは僅か72時間である。

1時間が1日、というゲーム内時間の設定がある。それを思い出し、「神の祝福」の効果時間と対比した。そこからこの「設定」は生きた設定だと確信した自分は、真っ先に生存可能時間を計算する事とした。

自分達がこの『絶望の迷宮』の攻略にかかった時間が約4時間内、ボス邪神にかかった時間が1時間、戦闘時間が2時間。そして、移動にかかる時間が1時間だ。

ただ歩いて迷宮を出るだけで机上の上では丸一日かかる。しかもこの1時間も常時「迫撃」のカラ撃ちや「高速飛翔」「影渡り」等の高速移動スキル、「聖者の行進」等の移動補助スキル、「疾風迅雷の秘薬」の得盛だから出来た話だ。少なくとも、全員が徒歩移動で歩いていた場合、何時間掛かるかは計測した事が無い。例えば、道中のMOBモンスターが全く居ない場合でも非常に苦しい事になるだろう。

付け加えると『絶望の迷宮』の近くに、人間の住む町は「無い」。自分達が絶望の迷宮に集合できたのは、移動魔方阵ワーポータルを使って飛んだのだ。それも、町から先行拠点へ、先行拠点から迷宮への二段構えだ。

じゃあゲームの時にどうやって戻っていたか？世界地図ワールドマップの「町」をクリックすれば済んだ話だ。「今」ワールドマップを開ける奴が居たら教えてほしい。どうやって開くのか、とね。しかし、迷宮の

外ならば水と食料は手に入る公算がある。最悪の状態は避けることが出来るだろう。

少なくとも現在、水源が無いと言うことが判っているのは、迷宮内部だけだ。

つまり、自分達が「生存」する為には、少なくとも72時間以内に迷宮を突破せねばならない。

もし自分達が（実に理想的ではあるが）「人間」とは全く異なる生命体と成っていたり、この世界の物理法則や自然法則が^{げんじつ}あちらと物凄く異なっていたりした場合は話は異なる。しかし、自分の直感がこう告げている。「そこまで設定するのは、^{メーカー}製作者でも面倒くさいだろう」という点だ。この世界の設定がある程度ゲームの設定を引きずっている以上、この推測は結構いい線を行っているのではないか。

長々と^{サブマス}副官に語ったが、半分も理解してもらえなかったようだ。

「ボク、考えるの苦手なんですよお……」

「これだけ覚えておけばいい。お前は自分の手足となって動け。決して悪いようにはしない。必ず、^{キルメン}精鋭達は生還させる。」

ナイトウのポーチの中にはそこそこの量の回復薬が入っており、飲むと全身の傷があっさり回復した。まさにマジックポーション。そして、私のポーチの中には回復薬^{POT}が入っていないかった。全部魅^{かわ}せ装備だったという事を白状せざるをえない。いや、だってほら。スキルで結局何とかなるじゃん？みたいな。自分のHPが減ったり

状態異常を貰ったら「血を肉に」、味方のHPが減ったら「美味なる果肉」や「異常再生」、戦闘終了後に「死者の泉」でHPとMPのトリートメント。回復役としてのお仕事はこれで結構何とかなるし、最悪、戦闘不能が出たら「不完全な復活」を使って蘇生させればいい。修道者ほどヒーラーに特化している職でもないし、その代わりに色々な状態異常攻撃が出来るから需要がないわけじゃなかった。そもそもウチのギルドに修道者が居ないのが悪いんだけど。

「で、タイタンのポーチは一体何が入ってるのさ。」

そうタイタンに問いかけながら、ジト目でナイトウを見る。奴は、「もしかしたら回復薬の一つ位は入ってるんじゃないかね？」とさつきからずっと私の腰のポーチをまさぐっていた。後こっそり太ももとか触ろうとしないほしい。自分で整理したくないカオス状態だからあまり強くは言えないが。

「あ、この、ネコミミとシッポ装備してくんね？」

昔もこのやり取りをした。MMOにネコミミとシッポは何故必須アイテムなのか。

「だあほ。断る。」

「俺は…あんまりいい物入って無かったぜ、精々POT数種と予備の武器ぐらいだ。何しろ突貫作業で上げたからな。」

現実問題として、49LVと50LVの差は小さい。必要EXP経験地の量は桁違いに差があるが、経験地の量に見合っただけ強化されるわけではない。それでも上げてしまうのはゲームの性サガとしか言いようが無い。

「しかし、何処のドラ もんの4次元ポケットだ、こりゃ。」
もしかしたらしまえるんじゃないかね？と、タイタンはポーチに剣と盾かさばるまのを突っ込んでしまっていた。なにそれ超便利。

「んで、さっきのBOT野郎の話だけど」

「タイタン、証拠も何も無いのにそういうの、良くないよ。」

窺める。正直、火の無い所に煙は立たず、と言うが、MMO全般において、そんな事はない。出る杭は打たれる。多少目立った行動をすれば晒される。行動が気に食わなければ晒される。装備が良ければ晒される。仲間内でも些細な事で晒される。ヲチ目的でギルドに潜入する輩も居る。火が無ければ自分で燃やせばいいじゃない、という話だ。

レベリングが早ければ「BOT」、金を持っていけば「RMT」、高レベルなPSは「チーターorバグ悪用者」、些細な失言で「性格地雷の糞野郎」。目立って無ければ捏造もある。

人それぞれがディープファンタジーに注げる時間は異なっていたのに、それを無視する人が多かったのも事実なのだ。

まあ、話が往々にして事実である事も多いというのも、「MMOは魔界」という喩えが当てはまるというのは私の感想。

「まあ、アイツの話だけ。死者が居るって…話、どう思う？」

「そ、そういうえば。ヤミーとヒゲはど、どうなったっけ？」

ナイトウがまさぐり続けながら言う。

私の顔から血の気が失せた。そういうえば、すっかり失念していた。ヤミカゼとヒゲダルマはどうなったのか。記憶を探る。邪神を倒す直前はどうかだった？ヤミカゼもヒゲダルマも、瀕死、もしくは戦闘不能状態に陥るダメージだったんじゃない？

血の気が引いてくる。私のPTは5人PTで、回復役が私で、HP管理は私の仕事だった。間違いなく、あの二人は重症な状態だ。

「えっと、その。多分。どっちかが…せんたくのうになってくたばってる。多分」

太ももをまさぐる手が、ピタリと止まった。

さつきからオレはチャカのかばんインベントリを整理するついでに太ももをずつとかばん越しにまさぐっていた訳だが（ついでに尻も触っていたが）、決して私利私欲の為ではなく、触感がどうなっているのか調べるという崇高な目的があるのだ。触り心地がタマランという結果に落ち着いたがそれは決して邪念の為せる技ではなく、その実験結果の成果の賜物である事は確定的に明らか。指摘されたらそう答えるつもりであった。何もやましい気持ちがあるわけではない。いや、絶対にそうである。真理の追求者である魔法使いがそうであるのでそういうことなのである。

「えっと、その。多分。どっちかが…せんとうふのうになってるくたばってる。多分」

それますぐね？オレは「それなり」のHP減少量で満身創痍だった。もしかしたらポツキリ逝ってるんじゃないかね？

「まづいよね？」

「と、時既に時間切れかもしれない。」

「更に、蘇生とか何とか言っていた。俺の頭がおかしくなったんじゃないなら。」

苦虫を噛み潰した様な表情は正にこういうものだろう。イケメンがやると何にでも絵になりやがる。Fuck！

「気に食わないけど、アレBOIT野郎についていった方がいいと思う。」

ナイトウは？とタイタンが振った。急に振るなよ。オレアドリブ

に弱いんだから。

「お、オレもタイタンの意見に賛成。」

反対する理由も無い。

「わ、私は……」

当然行くべきだ。理性ではそう考える。でも確認するのが怖い。PTで死亡^{戦闘不能}者を出した場合、第一に責められるのは回復役^{ヒーラー}の腕だ。実際にどんな理由があろうと、大抵の場合の責任^{やつあたりなき}の所在はヒーラーになる。本人自身もミスがあることは知悉しているので、更にやりきれない雰囲気になる。

「確認するの、怖い」

デーブファンタジー
かつてのゲームですらそうだったのだ。今の状況で耐えれるとは思えない。モニターというフィルターを通してでも耐え難い苦痛だったのに、だ。

「怖いとか怖くないとか、そういう問題じゃない。アイツの口振りから、ずいぶんと自信があるんだらうよ、蘇生。」

ゲームかよ、と吐き捨てる。

「でも、あの」

そうじゃなくて、自分のミスを認めたくない。空気を悪くしたくない。タイタンの顔が鬼のように歪む。

「でもじゃねえよ！ただでさえ訳判んない状況なんだよッ！」

「ひっ、あっ」

身長が2m近くある、^{全身鎧の大男}鋼鉄の塊に怒鳴られて体が竦まない人を教

えてほしい。大人と子供、男性と女性、その「差」は、威圧感を倍増する。

「タ、タイタン、止めようぜ、ロリ苛め良くない」

「虐めじゃねえ！」

「い、いやよお、混乱してんのもわかるんだ。でもよ、今頭に血イのぼらせても、解決、しねえべ。」

ナイトウが諭すように、場を収めるように、ゆっくりと語る。

「チャカも、アレだ。誰もこんな事になるなんて、思ってたかったべ。誰の責任でもねえ。だから、ちみつと我慢してくれや。」

「オレも混乱してつから、よくわかんねえけどよ。行って見なきやわかんねえ事もあるべ。」

頷くしか、私に選択肢は無かった。

「これ…か。」

「はい、コレです」

集合地点に運ばれてきたのは、見るも無残なモノ^{死体}だった。鎧に何個もの大穴が開き、腸^{はらわた}がはみ出している。だらりと投げ出された手足に力は無く、瞳は瞳孔が開き、誰が見ても死んでいる状態だ。思わず目を背ける銀の騎士^{ふくかん}を誰が責めれるか。

遠巻きに取り巻いている群集も、惨状を見て思わず目をそらす者ばかりだった。

「ヒゲダルマ、か…」

この特徴的なヒゲの筋肉、モニター越しでも十分な記憶に残る。かつてのギルメンの一人だ。まだギルドが少人数の時、「体験でいいから入れて欲しいツスよw」と無理矢理気味に加入してきたコイツには、悪い思い出はなかった。「いろんなギルドを見てみたいんすよw」とふらりと去って行った後でも、話す機会は多かった。

「本当にコイツを生き返らせれるのか。」

死体を運んできた暗殺者が問う。こいつも大怪我を負っていたはずだ。自分が「癒し」たのを覚えている。

「判らん。が、可能性としては高いと思っている。」

「おいつ！」

怒気も露にする暗殺者。仲間が死んで、心の余裕もないのも当然だろう。だが、ヒゲダルマは自分の仲間でもある。全力を尽くして然るべきだ。

「そこに置いて、下がっている。『儀式』の邪魔だ。」

「完全復活の儀式」通称、『儀式』。修道者のスキルの中では最長の詠唱モーションを伴う高レベルスキルだ。戦闘不能からの回復死亡状態を行えるスキルの中で、対象者のHPを全回復する。だが、詠唱短縮ストップ装備の影響無視の特性を持ち、戦闘中に用いる事が出来ない、「クズスキル」の代名詞。そりゃそうだろう。戦闘中に使えなければいつ使うのか。戦闘後に使うにしても、膨大なMPを消費して得られるものがあまりにも少ない。もっと簡単に戦闘不能から脱却する手段は何個もあるのだ。

だがしかし、自分がこのスキルを選択する理由がない訳ではなかった。

第一に、最高位スキルを使って駄目だった場合、他の蘇生スキル

でも不可能と断じれる。その手間を省ける。第二に、その他の蘇生スキルは基本的に低HP状態で復活する。低HPで復活した場合、「痛み」をどう感じるかが判らないのだ。覚醒した時の周囲の者のHPは決してそこまで減少していなかったはずだ。なのにあのような惨状。麻酔がない状態で痛みに耐えとなると、狂死しかねないと感じたからだ。今後の為に、万全を期して置きたい。第三に、自分のMPの消耗具合による、自身への影響。何処までの減少が耐えられるのか。

完全復活の儀式は、丁度良い実験なのだ。

「では、開始する。『完全復活の儀式』だ。」

ネタスキルと言われる所以の超長時間のモーションとエフェクト。膨大な光の柱が死体^{ヒケタルマ}を覆い、周囲を風が吹き荒れる、人の言語ではない言語が自分の口から溢れ出す。囁くような、祈るような、謡うような、念じるような。膨大なMP^{ちから}が体から抜け落ちていくのを理解し、意識を手放しそうになる。光の中に見える千切れた一本の糸切断されているその糸を硬く結束し終わった時、光が爆発した。

べそをかいているチャカの手を引きながら、オレが目にしたのは光の爆発だった。何十人ものPL^{プレイヤー}に囲まれた中心部で光の柱が立ち上り、爆発が起きた。

「ありや、な、何だ？」

「多分あれが、『儀式』だよ。」

先行していたタイタンが小走りに戻ってくる。

「おい、やっぱり死んだのはヒゲダルマらしい。ヤミカゼも近くに居た。」

繋いだ手がビクリと震える。

「いこう。私達も合流しなきゃ。」

「おいおい、ムリしてんなー、と言うオレの心の眩きは誰にも聞かえない。タイタンもこんな小さい子供を怯えさせたら、後に響くだろう、と。姪っ子に怯えられて中々近寄らせてもらえなかった事を思い出す。姉ちゃんに言わせると、別の原因で寄せたたくない。という話だが、過去の経験を元にした対幼児スキルはばっちりだ。経験が生きたな！オレ！」

「おう、さっさと合流してアイツのお話とやらも聞いてやるうじやないか。」

タイタンは極めて不機嫌だ。こんな状況に陥ったのだから当然じゃないかね？とは思うがもうちょっと楽天的に生きてもいい気がする。こんなぴりぴりしたふいんきだとオレの寿命がストレスでマツハなんだが。

そして、更に近づくと、おおう、や、おいマジで生き返ってんぞ？やら、ありえない、夢だろこれ、とかの雑多なざわめきが広がる、そんな中、朗々とした声が響き渡った。

「諸君、予想している者も多いだろうが、我々は恐らく『ディープファンタジー』の世界に居る。」

「そして、我々は『危機』の真っ只中にある！」

予想以上に派手なエフェクトと、魂を削られるかの疲労感。引き換えに得た、ヒゲダルマの無傷の肉体。破損した鎧は完全には戻らなかった。呆けた顔をして、目を覚ました筋肉の塊が周りを見渡したのを確認した後、自分は演説を開始した。

「そして、我々は『危機』の真っ只中にある！」

全体に状況を認識させる。

「食料を持つ者はこの場に居ないであろう。水を持つ者もこの場に居ないであろう。」

ざわり、ざわりと不安が感染する。PVEとPVPに主眼に置き、生活要素をそぎ落としたMMOの英雄になったという事は、生活をする上では非常に都合が悪い。人間の三大欲求の、食欲、睡眠欲、性欲の全ての面で『貯金』が全く無いのだ。

「そして、この『絶望の迷宮』に水源は、おそらく無い。」
何度も何度も通った場だから判る。恐らく、水源はこの迷宮に存在しない。

「モンスターMOBも再びリスボンして沸いている可能性もある。」

ざわつ、と空気が変わる。これがゲームだったら、たいした問題ではない。モンスターは蹴散らす為に存在し、HPが尽きても回復魔法やアイテムで全快、次々に撃破できたであろう。だけど、HP減少の苦痛を味わった者なら判るであろう。たとえHPが幾らあっても、傷を負えば痛みを感じ、苦痛で動けなくなる。あの死体を見たか。胴体に大穴を空けて、虚ろな目をしたヒゲダルマを。

「そこで、当ギルドから、一つ提案がある。」

「『絶望の迷宮』から脱出するまで、当ギルド、『レゾナンスペイン』の指揮下に入ってもらいたい。」
空気が凍る。一切の雑音は凍りつく。

「賛同するギルド、PTのリーダーは30分後までに当方に通達して貰いたい。」

ざわつ…と、お互いに探り合う視線が交錯する。

「尚、これは自由意志による参加を基本とする。拒否して貰っても構わない。以上。」

先ほどの演説を行った場所から離れ、ギルメン達を集合させる。皆が不安な表情であった。

「マスター、本気ですか。」

不安げに周囲を取り囲むギルドメンバーに向い、普段の通りに言い放つ。

「本気だ。今から30分間、「戦士」と「暗殺者」は5・5での対人訓練を行う。「修道者」は集団の横に付き、負傷者が出た時点で「即時に回復」しろ。「魔法使い」はスキルを空撃ちして「射程の把握」を急げ。」

務めてゲーム時代の言い回しを多用する。

「後、グッさん、ちょっと。」

「死霊使い」の、刺青を入れた坊主頭の青年を呼び出す。

「グッさんは、さっきの受付でお願いします。」

「え、僕は訓練参加しなくていいのかい？」

どことなく、ほっとした顔を浮かべた坊主。

「グっさんはウチの面子じゃ一番人当たりいいからな。是非受付で。」

「ほいよ、任せてちょよ。」

軽いノリで、人懐っこい笑みを浮かべ、「こっちでさっきの受付しまーっす」と走り出した刺青坊主を見送りながら、残りの面子を見渡す。

「何、ゲームだと思ってやるぞ。回復はしてやる。」

第四話 モンスターを食べてこそ英雄

さっきの『演説』で、各々の所属するグループごとに距離を取りつつ、ひそひそ、こそこそと相談しあっている中で、私達のPTは酷く滑稽に映っただろう。

「ひげええええええええええ！」

泣きながら筋肉髭達磨に抱きつく長身瘦躯の黒髪黒目の暗殺者、という絵面は見た目に暑苦しい、と思う。私じゃなくてもそう思う。

「よかゝったなああゝ、ほんと、いきゝかゝえってよかゝったなああゝ」

「ほんと、ええ話や……」

ぐしゃぐしゃに顔を歪め、うわんうわんと泣きながらヒゲダルマの分厚い胸板に顔を埋める細マツチヨな青年と、貰い漢泣きをしているナイトウを、生暖かい目で見守る私。タイタンは難しい顔をしている。

当のヒゲダルマは呆然とした表情で、硬直をしている。何かおきたか把握するのに時間が掛かってるんだとおもう。目が覚めたら目の前で野郎二人が大泣きして、しかも片方が自分に抱きついている（しかも見知らぬ他人がだ！）とか、あまり想像したくない。陽気なヒゲダルマもそりゃ困惑するだろう。

「えっと、ヒゲダルマ、ヤミカゼ、そろそろ話があるんだけど……」

ヒゲダルマの瞳が焦点を結び、瞬時に顔が般若の形相に変化し、その極めて筋肉質筋質な右腕を振り上げ。

「この痴漢！」

という、野太いけど甲高い声と共に、物凄い勢いで目の前の男の左頬を平手でぶち抜いた。

バチンどころかバツチイインという物凄い音を立て、ぐるりとヤミカゼの顔があらぬ方向を向く。

目を丸くしたのは私やナイトウだけではなく、タイタンも目を丸くしていたのは言うまでも無い。

目が覚めたヒゲダルマは、ヒゲダルマではなくなっていた。「藤田八重」と名乗り、花も恥らう24歳の工学系の大学生と言う。一つ年下の先輩が大好きで、物凄い恋をしている（本人談）らしい。アプローチにも全然なびかないから困り者だ、と長々と語るのので、いい加減怖くなったので性別を尋ねたら、ヒゲダルマは女の人だった。MMOオタ、と語ってた割に^{USMMO}ディープファンタジーの事は一切知らなかった。何それすぐポシヤリそうなタイトルっすねーと変わらずの口調で言うので、私はさらに混乱する事となった。ヒゲダルマの名前をこの人は知らない。けれど、ヒゲダルマ本人である、と半ば確信していた。

「で、ベルウッドさん曰く。この世界はディープファンタジー？の世界であり、ウチらはそのキャラクターに転生？したと言う事ツスカ。」

自分の容姿が^{アバタイ}筋肉^{ムキムキ}髭^{マツチヨ}達磨なのに多少のショックを受けていたみたいだったけど、私達のような混乱はしなかったみたいだ。「これはこれでアリっスね」らしい。何がアリなのかは怖くて聞けなかった。

「その、ウチ一つ疑問なんスけども。」

「ヒゲ、何が疑問？」

ヤミカゼが頬に物凄い銀杏を引っ付けながら、微妙な距離感を取って聞く。さっきのピンタは相当効いたようだ。南無い。

「その、スキルって使えるんツスか？ 剣と魔法の世界に来たなら使って見たいツスよ。」

何で今まで私達はそんな事に気が回らなかったのか。常識に囚われてはいけないのかもしれない。だって今はMMO、テーブルファンタジー剣と魔法の世界のはずなんだから。

「ゴルアツ！ 負傷受^{ダメージ}けんの恐れてるんじゃないやねえ！ 対人の基本を忘れたのかアツ！ ケツ引いてるんじゃないやねえ！ 突っ込めダボがあ！」

どこのヤクザかチンピラかと思うような罵声が響き渡る。鬼の形相をした銀鎧の狂戦士は、叫びながら獲物の両手持ちの大斧を構えたかと思うと、赤い大盾を構えた戦士に対し猛烈な勢いで距離を詰めて肩からのタツクルをぶちかます。

1対1で、盾戦士同士の不毛な殴り合いに興じていた赤の戦士は、側面からの「体当たり」に対処できずに大地に転がる。銀の戦士は突進の勢いを殺さずにそのまま大地を蹴り、渾身の力を込めた「憤怒の一撃」。迫り来る大斧が、恐怖に顔を歪めた哀れな犠牲者^{たてせんし}を打ち砕く、かと思われるその瞬間。

「盾よ」

薄いフィルム状の魔法の盾が大斧を受け止める。「憤怒の一撃」の大地をも砕く勢いを完全に遮断し、その威力を無に返し、魔法の

盾は霧のように消え去る。

「そこまで、丁度30分だ。」

「マスター！」

自分の体内時計では後1分ほど残っていたが、戦闘不能者死人を出されても困るのでとめる。銀の戦士はまるで犬の様にクルクルと自分の周りを回りながら、楽しそうに笑う。

「体当たり」から「憤怒の一撃」のコンボ、見てくれました？イケますよ！コレ！凄いですよ！」

自分が「盾よ」で止めなかったらもう一度『儀式』をやらなきゃいけないだろう。その言葉を飲み込み。

「動きの堅さが取れてきたな。「行ける」な？」

「はいつ！ボクはいけます！」

「ムリッス！マジイターっす！」

「なんとか・・・なる？ヒールは間に合います、多分：」

全員が全員、以前の動きが出来なくてもいい。少なくとも『恐怖で足が竦んで動けない』という状態にならなければ、何とでもなる。ゲーム時代いつも通りの調子で、取り合えずの慣らし運転をさせる。何事も、最初の一步が肝心なのだから。

「魔法使いの方はどうだ。」

「おう。目算誤らなければ大丈夫だろうよ。」

「魔法」が使えるようになって面白いのか、集合を掛けてもまだ魔法を使ってる奴らもいる。後は選択を間違えなければ大丈夫だろう。

「そろそろ止めさせろ、筋肉も脳味噌も有限だからな。」

「うーん…」

結論として、私とヒゲダルマは「スキル」を使えなかった。こう、喉元まで出掛かっているけど、単語名をド忘れして出ない時のあの感覚というかなんと言うか。もどかしい感覚がある。でも、他の奴らは意外と簡単に使っていた。「体が覚えていた」という話で、現在進行形でナイトウは私を持ち上げて「飛んで」いる。ほづら高い高い、じゃない！くそぞう！

「な、なんかこう。物凄く疲れるんだけどな。」

いや、疲れるなら飛ぶの止めるよ。なんだよ嫌がらせかよ。私が使えないからって！

「体感的には大分変わっているが、全く無理とは言わないな、これは。」

タイタンもその気になって、ぶんぶんと剣を振り回している。ヤミカゼは無言でヒヨンヒヨンと飛び回っていた。楽しそうだ。

「皆さんズルイッスよー。ウチも使ってみたかったツスよー。」

ヒゲダルマが恨めしそうに言う。私も使ってみたかった。

「で、どうすんの？さっきの指揮下に入るかどうかって話は。」

皆が新しいおもちゃに夢中になっていたので、強引に話を戻した。

人当たりのよさそうな笑顔を浮かべる、「レゾナンスペイン」の

受付の刺青の坊主の元に向かう。

「あつ、君たちは参加？それとも不参加？」

「私達「ザ・フル」は、ベルウッドさんの、「絶望の迷宮を出るまでの一時的な指揮下に入る」という提案に同意します。後、野良フリーのヒゲダルマさんも同じく同意です。」

取り合えずの代表として私に白羽の矢が立ったのは、得意だから、というわけではない。他にやれそうな人が居なかったのだ。ナイトウは絶対ムリムリ、と言うし、タイタンは「長期間休止している俺より、チャカの方が今の知り合いは多いだろ？」と言う。ヤミカゼは無言で私を指差した。ヒゲダルマは判れないから君たちについてくツスよ、と丸投げだ。

「ザ・フル」とは私達4人のギルド名で、今は亡きマスターが「俺ら馬鹿だからこれで行くぜ。文句は言わせねえ。」と適当につけたものだ。「愚者」とか中々酷いネーミングだと思う。否定は出来ないけど。

「で、少し聞きたいんですが、このお話に賛成の人はどの程度いるんですか？」

「参加ありがとうございます、で、そーですねー…ジャンヌさんとこと、ネクロンさんのところはギルドごと参加、後野良の方も大体参加ですね。不参加って来た人のほうが少ないですよ。」

「アンリミは？」

「あそこは…俺らは俺らで自由にやる。お前らはお前らで勝手にやれ」だそうですね。」

「そっか、ありがと！じゃ、暫くよろしくお願いします！」

「こちらこそ。サクっとこんな陰気な場所から出ちゃいませう！」

刺青坊主と友好的に握手し合い、にこやかな笑顔を浮かべている間、ジャンヌも居るのか、うげえ、と思う。苦手な相手というのは誰にでもいるのだ。同時に、アンリミが参加しない事に胸をなでおろす。

「それじゃ、うちのマスター呼んで来るんで適当に待ってて下さい。直ぐ戻って来ますんで。」

刺青坊主を手を振りながら見送ると、「チャカたん乙」「チャカ乙」「乙」「お疲れツス」後ろで控えていた面子がそれぞれ適当な労いワードを投げて来た。うん、ナイトウは「たん」って付けるなこっばずかしい。

「で、アンリミって何だ。」

「『お友達事件』のアレが居たギルド。」

正式名称、Unlimited。略称アンリミ。そのギルドは「ディープファンタジーの規約に引っかからないなら何でもOK」という、私からしてみたら非常に苦手な人種の集まるギルドだった。迷惑狩りや狩場占領、街中での超エフェクトスキル乱射、対戦時の煽りや暴言、取引の穴を付いた詐欺、何でもござれだ。厳密に規約を適用すれば当然引っかかる行為だけど、ギリギリラインを突っ走る彼らは非常にそのあたりの回避が上手かった、らしい。運営じゃない私からしてみたら、なんともかんとも忌々しい話だけど。

結局、やる事がなくて面白くなかったんだろう。何でもいいから暇がつぶせれば良かったんだろう。

で、そんな彼らがアホみたいに目立っていた私に目をつけないはずはなかった。

大体1年と数ヶ月前の話になる。ログインした時に耳打ちが飛んできたのが始まりだった。「すみません、お友達になりませんか」

から始まった、この一連のストーリーカー事件はザ・フルの内部でのみ有名だ。ギルド内部にネカマだかみんくあつととばらしたのもこの事件が切欠だったが、詳細はあまりにもキモいので伏せさせて貰いたい。結果として、アンリミの一部が『付きまとい行為』ハラスメントでBANされたのと私がMMOでも引き籠もり気味になったと言っ話。

「ああ、『お友達事件』の。なるほど（笑）」

笑うなタイタン。当時のお前も私が女だと信じ込んでたじゃない。

「それでは今より出発する。各人装備確認の後、進軍開始！」

手際よくベルウッド氏が集団を纏め上げ、きっかり30分後に私達86名は絶望の迷宮からの脱出を開始した。一文で書くと非常に簡単に聞こえるけれども、相当連携の取れた『廃人ギルド』じゃないと、こうは行かないと思う。

大まかに私達は、スキルたたかえるが使えるメンバーと使えないメンバーたたかえないに自己申告で分けられ。その後、スキルが使えるメンバーは職ごとの集団に分かれた。

主に戦闘は、「釣り狩り」と言う方法で、行うという説明だった。少数の先行班が敵集団を弓矢等で誘導し、大部分の戦士と暗殺者は主に母集団の側面と後方に護衛として配置、真正面には魔法使いが配置され、主に魔法の射程レンジに入れて戦う、というやり方だ。戦えない人達は中央でガッチリガード、と言う事。

今までのやり方は大体戦士が敵を真正面から受け止め、暗殺者と修道者が側面か背後から、魔法使いと死霊使いはその外側から戦う、と言うのが基本だったので多少反発があったが（主に魔法使いの面

子から）魔法使い集団の後ろに修道者集団が着くと言つ話で皆納得した。

そして、私は中央集団でお守りされている、と言つわけだったりする。

恐れていたMOBの湧きは、通常通りの「設定」のようで、これなら私達は大丈夫かな、と思つたのだった。

「不味いな。」

出発して12時間、そう一人ごちる。『演説』の時は殊更にMOB^{モンス}の脅威を強調したが、自分は「湧いていない」と想定していたのだ。万が一の湧いていた時の為に、予め集めれるだけの人数を集めてから脱出を行う事にした。保険は掛けておいて正解だったと思つたが、より困難な状況に陥つたことは確実である。

「マスター、側面後方異常なしです！」

「ああ。」

「前方に5匹集団、いつもの数の奴らだ。ちよつくらやつてくるぜ。」

「任せる。後、お前はそろそろMPを温存しておけ。」

現在3回目の「戦闘」だが、掛かる時間と被害は、今のところは0に等しい。出来る限り遠距離から発見し、多人数の魔法使い達が集中して「地獄の炎」やら「氷の嵐」等の高火力スキルを浴びせかけるのだ。消耗する時間は精々5分から10分。だが、戦闘の度に

精神を削り、汗をかく。「聖者の行進」を常時維持しているだけの自分ですら休憩時より消耗しているのだ。歩き、移動するだけでも生きる為に必要な「水」は奪われていく。負傷や病気を負った場合は更に消耗するだろう。回復魔法で怪我は治せるが、飢えと渴きは恐らく、癒せない。いや、断言しよう。渴きは、「魔法」では癒せない。

理由？自分の喉が渴きを覚えているからに決まっている。糞が。

「先行班、そろそろ交代だ、疲れただろう。」

「はい、了解です…ありがとうございます。」

気を張る。体の痛みや疲労は少ない。渴きと空腹が募る。これを数日間続けねばならないか。

だがしかし、ギルドマスターが一番貧乏くじを引かなければならない。

ふんぞり返って命令しているだけでは、誰も付いてこないのだ。

淡々と歩き続け、淡々と停止し、遠距離で「魔法」の爆炎と嵐が巻き起こり、また淡々と歩き続ける。その間私達が出来る事は特にない。淡々と歩き続ける事だけがお仕事だ。だんだん皆無口になっていき、気力がうせて来る。おなかへった。もう何時間歩いたか判らないけど、とにかくおなかが減ったのだ。幸い、物凄く疲れたと言う事はない。その分、空腹がはつきりと理解できた。

「おなか、減ったねえ」

横で歩いていた「ネクロマンサーズ」のネクロンに話しかける。

「…ああ、そうだな。俺、年越し蕎麦食べ損ねたで…」

その時、本日4度目の「敵発見！行軍停止！」の声が聞こえる。

あの声を出す人も大変だ。そろそろ声が枯れて来ている。

そして、本日4度目の「戦闘」が終わり、私が口にした何気ない一言が、悲劇を巻き起こす事となったのだ。

「モンスターって、おいしそう。」

「・・・食べるのか？この6本腕。」

あれよあれよ、という間に「6本腕”食べるんじゃない？”という話が広まった、私達は現代っ子で、空腹だったのだ。多少異形の物でも、腹が減っては戦が出来ぬ。という格言に基づき、戦闘班の戦士と、魔法使いがざくざくと切って焼く。異形の肉でも、焼けばそれなりにおいしそうな匂いを放つ。本当に美味しく食べるなら、毛をむしって、皮を剥いで、血抜き等の作業をしなければいけないでも、そんな事より「モンスターを食べる」と言う発想に皆して心躍っていた。

「うし、火は通ったなー」「上手に焼けましたー！」等の、明るい会話が飛び交う。楽しい団欒の始まりだ。先行班の人にも後で届ければいいよな！とか、学生時代のノリを思い出す。

「じゃ、皆様。お手を拝借ー。いったただきまーっす」
流石「ネクロマンサーズ」のギルマスネクロン。サクっという所もっていく。

「火弾」を使って焼き上げた肉は、じゅうじゅうと熱い肉汁を垂らし、いかにも美味しそうだ。空腹は最高の調味料、って名言だ。と思いつながら、皆が皆、かぶりつく。

味は悪くなかった。最近食べた物の中では一番美味しかった。

飲み込んだ直後、猛烈な痛みと吐き気に襲われてのたうち回る羽目にならなければ、きつともつと美味しかったことだろう。

更に不幸なことに、修道者の大半も「空腹」に負けて口にしていったのだ。「肉」を。

第四話 モンスターを食べてこそ英雄（後書き）

冷静に考えたらモンスターなんて食べたもんじゃないですよね。

そんな私は鶏の解剖をした時、「美味しそう」と思った人間です。

と言う感じで、明日はお休みします。

第五話 争いを収めてこそ英雄

「すみません、ベルウッドさん！緊急です！」

5度目の「釣り」^{Pull}を開始する直前、血相を変えたグっさんが駆け込んできたのは、本当に幸運だったに違いない。釣りを開始してから足を止める事は死を意味する。釣り役の戦士に停止の合図を送り、戻らせる。

「騒ぐな。感知範囲に「引」掛かる」ぞ。」

「…っ、はい。済みません。」

「グっさん。簡潔に状況だけ頼みます。」

グっさんは人当たりのいい好青年だが、なんとも余計なおしゃべりが多い。一言釘を刺すことを忘れない。

「本隊、中毒者多数です。」

「…修道者が居ただろう、それで対処できないのか。」

「無理です、修道者がほぼ全滅状態、その他も被害多数。」

なんてこった。状態異常^毒で全滅か。どうして自分のように注意して行動しないんだ。

状態異常を回復するヒーラー^{修道者}が真つ先に異常を貰ってどうするんだ。

しかし、おかしい。”6本腕”は毒攻撃はしてこなかったはずだ。強力なMOBだが、主に物理攻撃のみはずだ。

何故だ？他のMOB^{はけもの}が湧いたか？絶望の迷宮で毒攻撃を持っているのは”黄泉蜘蛛”、”無貌の暗殺者”、”壁潜りの大蛇”…後は何だ？レア湧きの”白蛇の乙女”？一体なんだ。何にやられたんだ。「直ぐに戻る。襲撃MOBは倒せたのか？」

「あ、違います。モンスターじゃなくて、食中毒です…」

何を言っているんだグっさん。ここに食い物なんて無いだろう。

「グっさん、すまないけど、もう一度お願いします。」

「MOBを皆して食べたんです。」

「は？」

「全員、モンスターを食って、当たったんです。」

焼き6本腕、を食べた直後に襲い来る、猛烈な痛みと吐き気。これは食べ物じゃなくて、毒物だと体が認識して、吐き出す。ぐちゃぐちゃに噛み砕かれた肉と同時に出てきたのは胃液ではなく、血液だった。真っ赤なマー・ライオン状態でうめく私。

「お、お(う)う(う)う(う)…」

おおおおお、刺し込みが！みぞおちの辺りにまた！

食あたりは、冷凍保存した1年モノのラム肉を無理に食べた時以来である。あの時の肉の味は多少妙な味がして、不味かった記憶がある。アレは無理して食べなきゃ良かったと笑い話に出来たけど、今回のそれはそれ以上に酷い。

むしろ私が軽い部類で血の泡を吹いて痙攣している人の方が多い。食べなかつた少数の面子が「おい！POT使え！」「ベルウッドに連絡取ったか！」とか大騒ぎしているのが耳に届く。ああ、回復薬^{P.O.T}：持ってくれば良かった…。

生命力がガリガリ削れるのが判る。ざんねん、わたしのぼうけんは、ここで終わってしまった…ってない、まだ終わってないよ！ふあっきん！

「ち、チャカ。POT、多少楽になるべ。」

ナイトウが真っ青な顔で近寄って来て、小瓶の蓋を開け、私の口に謎の液体を流し込む。焼け付いた喉の荒れと胃の痛みが楽になる。

おお、POTすげー。間違はなく神液体。と思つた直後にまた物凄く腹部の痛みが襲い掛かってくる。

「毒は…回復薬^{POT}じゃ治らないのを…忘れてた…」

毒状態は、状態異常の中では極めて多彩なバリエーションを持っている。HPの時間による減少と、普通の回復薬^{POT}では治らないという特性は全ての毒に共通している。ただ、減少したHPを治癒^{かいふく}すれば問題ないことがほとんどなので、治らないという表現はおかしいかもしれない。時間が経てば大抵の状態異常は治るのだ。どれだけ時間が掛かるかはわからないけど。

「ぐげ、ごほつ」

ゴボリ、またと胃に溜まった血が食道を通って口から流れる。また痛みが来る。痛みのせいで取りとめも無いことが思い浮かぶ。ああ、そうか。こういう時に何をするんだっけ。「血を肉に」だっけ。自分の状態異常を取って、HPを回復してから、周りの状態異常回復だっけ。使えたらいいんだけどなあ。困らないのになあ。

そう願つた直後、私の体から、MP^{なにか}が減るのが判つた。

脈動しながら湧き上がる生命力。赤黒く纏わり付く不吉のオーラ。毒によって奪われ、害された命^{HP}と健康^{ステータス}が修復されていく。約30秒^{いちびょう}に1度のHP回復。再生効果。修道者の「癒しの光」に比べて即効性で劣るものの、十分な効果を持つ自己治癒スキル、「血を肉に」が発動した。

「ちや、チャカ、スキル？血を肉に？」

「…うん、まだ苦しいけど、使つた。」

立ち上がる。口に残る鉄錆の味。ぺっぺつとそれを吐き出す。喉の荒れが収まってくる。散々吐いて喉はからっただけども、いける。だんだんと自分の体調が収まってくるのが判る。毒により傷つけられた食道や胃壁は修繕され、既に体内に吸収された毒素は分解され、元の健康な体を取り戻す。

迷宮の石畳は私達の吐瀉物と血と何か良く判らない液体で異臭を放つ。改めて回りを見渡すと、POTを用意していた修道者（ヒーラーでも自分が被弾した時用に用心して持つてくる人も多い。持つてこないと地雷扱いされる。酷い。）が回復薬を飲み、体力を取り戻し、自らに解毒スキル「穢れ払い」を使用し、立て直しつつあった。

先行班が戻ってきたのはその時だった。

「おい！一体どうなっているんだ！」

怒りの表情も露にした、ベルウッド氏がそこに居た。

グっさんの報告を受けた時、何を言っているのか自分には理解できなかった。

そもそも、自分の思考の範疇外にあったのだ。まさか6本腕MOBを焼いて食うという事を考えている人間が居るとは思わなかった。いや、腹が減って何か食いたいという事はわかる。判るが、何もよりにもよって”6本腕”を食う必要は無いだろう！

”6本腕”を説明するのは難しいが、あえて描写するならば逆立ちに直立した牛の股間に目の無い雄牛の頭があり、6本の蹄を持つた人の腕を胴体から生やし、それに剛毛を生やしたような、そんな存在だ。ヴモオオオオと叫び、6本の腕でぶん殴ってくる。確かに牛のような感じは受けなくも無い。しかし、幾らなんでもそんな物を食うな！お前らの脳みそはスポンジで出来ているのか！

どうにもこうにもやりきれない感情が募る。そもそもこいつら、自分がMOBを引つ張ってきたらどうするつもりだったのか。頼むから簡単に欲望に負けないでくれ。引つ張ってきた先が愉快なキャンプファイアー先だったらひき殺しにしかならんだろうが！

「おい！一体どうなっているんだ！」

適度にいいやけ具合の”6本腕”の残骸と、その周りで血反吐を吐きながらもがき苦しむ中毒者の群れ。一部の修道者は建て直しに掛かっていたが、何しろ数が足りない。「穢れ払い」を発動し、未だ血の泡を吹く病人を治癒していく。毒によって減ったHPは後回しでもいい。一体どういう経緯でこうなったのか、先に聞く必要があるだろう。大抵の人間は過ちを犯した場合、体に刻み込まないと忘れてしまうのだから。

「グっさん、どうしてこうなったのか、一から話して下さい。」

「あ、いや、なんていうか…その。中央組の中で話題が上がったんです。食べれるんじゃないかって冗談が。それで側面組と正面組が真に受けて調理し始めて…僕は止めたんですが。」

「おい、そりゃねーよ。俺らは中央組が食べるって主張したからやつただけだ！」

「側面組が初めに切り始めたんだよ。勝手に共犯にすんな。」

「んだと！？てめーらもノリノリで焼いてたじゃねーか！」

「そもそも食い始めたのは修道者組じゃん。一番食ってないのは僕らだ！」

「ちよつと、それはないわ。アンタ治してやったのウチやで？そんな事言っ？」

「僕らは敵を撃滅する、君らは回復する。立場は同じだ。当然のこ

とをして威張るのはやめてもらおうか？」

「あ、あ、ん？ちよお、アンタそこに座れや。ちよつとシバいたる。」

「やってみるよ、その前に君が火達磨になって転がるのが早いだろうよ。」

「おうおう、もやしっ子がイキってるな。やつちまえよ！」

「あの、その、そんな喧嘩してる場合じゃないじゃないと思うんですが……」

「お前らが言い出さなきゃこんな事にならなかったんだろっが！」

「そんな言い方ってない。責任転嫁止めてくれませんか？」

喧々囂々、非難の嵐。にらみ合う各グループ。未だに腹を押さえながら殺気立つ魔法使いと修道者。そして話はどういう経緯でこうなったのかから、戦犯裁判だれがわるいのかに移る。仕舞いには単なるいちやもんの付け合いだ。

自分から言わせて貰えば、こいつ等全員「同罪」だ。そもそも自分は「経過」を聞いたのであって、「犯人」を聞いたのではない。情報は十分出た。

「判ったからもつ止める。無駄なエネルギーを使うな。」

ガゴン、と戦棍が壁を抉り、言い争いを一時止める事に成功した。

「ギンスズ、お前は一体何をしていた。そもそも行進を止めさせたのは何故だ。」

生贄ギンスズに銀の副官を出す事にした。何しろ一番フォローが効く。後で頭を下げる事を覚悟し、なじる。この状況だとギルド外に適当な生贄せんぱんが居ない。

「え、マスター、その、どうしていいか判らなくて。」

普段から子犬の様に付きまとう銀の戦士は、怒りの矛先が何故自分に向いたのか理解できずに戸惑う。

「反論はいい。釣りで重要なのは何だ。言えッ！」

枯れ気味の喉に鞭打ち、怒声を作り上げる。

「は、はいっ！釣りフール役が戻ってくる時に過剰にMOBを引っぱって来ない事です！」

「違うッ！」

正解だ。

普段の状況で、釣り役をやる戦士タンカーの答えとしては極めて正しい。

過剰にMOBを釣って来た場合、拠点キャンブに居る面子の火力が万が一不足していた場合、生き残ったMOBの攻撃で戦士タンカーが死亡する。モンスターの塊がその後範囲攻撃を行った、より脆い職に向い、回復役をひき殺し、そのPTは全滅する。過剰に釣り過ぎず、少量過ぎず、適量を引っ張ってくる事は戦士の答えとしては正解だろう。

「拠点キャンブの面子が常時警戒する事だッ！」

「ッ……！」

何でそんな事をボクにいうのか、と涙目になって罵声を受ける銀戦士。違うんだ。お前一人が警戒しても意味が無いんだ。こいつ等全員が警戒していなきゃならなかったんだ。

「お前は自分の代わりに、集団の警戒を促す必要があった。拾い食いを止める立場にあった。反省しろッ！」

平手で頬を打つ。すまん。本当にすまん。後で幾らでも謝罪してやる。

パァン、と派手な音が響いた。

「我々の命令系統が招いた事故だ。申し訳ない。」
下げたくもない頭を下げる。本当に貧乏くじを引く役割だと思っ

「ごめ、ごめんなさい、ボクが悪いんです。ヒグツ、ご、ごめんなさい。」

涙ながらに謝罪の言葉を繰り返す銀の全身鎧の戦士を見て、私の心が酷く痛む。ちゃうねん。私が言い出したんだよ、本当は私が悪いん。本当にごめんよ。

「おい、チャカ。そこで実は私が悪いんです、とか名乗り出るなよ。」

ボソリとタイタンが耳打ちをする。いや、何だよ！悪いのは言いだしっぺの私じゃん！そもそも私が言いだしっぺって気が付いたのか。恐ろしい奴。

「なんでだよ、言い出したのは……」
「アイツが打った芝居が無駄になる。」

芝居？どういうこと？何のこと、と口に出すのを押しとどめられた。

「気が付いてないのかよ。一芝居打ったお陰で空気が変わったのが、本当に役者だな、アイツ。」

確かに空気が変わっていた。理不尽にも思える叱責と罰。殺気立っていた魔法使いと修道者は毒気を抜かれてはつの悪い顔をしていた。言い訳をしていた刺青坊主も微妙な顔をしている。煽ってた戦士は、銀の戦士に「おめーが悪いんじゃないよ。俺らが悪かった」

と謝罪していた。一番ノリに乗っていたネクロンはもう泣き出さんばかりだ。アンタが泣いても絵にならないから止めてください。お願いします。

「最初の言いだしっぺのお前が、ここで出て行ってみる。中央組が一気に悪者扱いだ。アイツもそんな事したくてやったんじゃないだろうよ。」

「むしろ僕達が一気に排斥される。」

ヤミカゼがいつの間にか居て、不吉な事を言う。

「最悪は、そうだな。そうじゃなくても、次の機会の生贄になるのはお前になる。」

え、いやそんな事無いでしょ？流石に皆そこまで悪くはしないでしょ？

「いや、ありえる。アイツは身内1人の犠牲でこの場を纏めたが、零細ギルド一つを犠牲にして纏める方が後腐れもない。」

「アイツはそういう奴だ。必要なら必ずやる。」

「同意。間違いない。」

タイタンとヤミカゼの台詞は酷く冷静で、私にはそれが恐ろしい現実感を伴って聞こえるのだった。

その後、5度目の戦闘が終わった後、3交代で睡眠をとることになった。堅い石畳の上で寝るのは非常に苦しい。ゴツゴツして痛い喉の渴きも酷いし、更に追い討ちをかけてのタイタンとヤミカゼの「必要なら必ずやる」。その言葉が耳から離れず、どうにも寝付けない。

「ねえ、ナイトウ。思ってたより楽しくないね。」

「ん、あ、ああ。うん。実際こんなもんだべ。フローリングの床で寝てた時を思い出すなあ」

ナイトウは何かずれた答えを返した。いや、フローリングの床で寝るってどういう状態だよ。私は流石にそんな経験、無い。

「ふ、布団を敷くのも面倒で、い、一ヶ月ぐらい枕だけで寝てた。な、夏場だったし。」

「何だよそれ。ものぐさにも程があるでしょ。」

それが意外と寝れるもんなんだよ、と軽く言いながら。

「でも、そ、その後、布団を敷いて寝たときは、感動したなあ。布団は高性能アイテムに違いないべ。」

「ホントだね、私はベッド派だけどね。」

石畳で頭が痛いなら、膝枕ぐらいならしてやろう。とナイトウが申し出てくれたので、ありがたくお言葉に甘えた。意外と楽に、眠れた。

パチパチと言う音が次第に小さくなる。周りを照らす光量が落ち、寒々しい薄闇の世界が広がる。焚き火に意味があるかは判らないが、何もせずに体温が逃げるよりはマシだろうと思ひ、薪を追加する。再びパチパチと焚き火がはぜ、暖色の世界が広がる中、銀の戦士が語りかけて来る。

「マスター、ボク思ってますが。」

「それよりも、さつきは済まなかった。」

先に謝罪を済ませる。理不尽な叱責だったのは間違いが無い。

「あの場で集団を崩壊させない手段で、最良の手だと自分が思った行動だ。お前に不快な気分を味わわせて済まなかった。」

銀の戦士はプルプルと首を振りながら。

「いえ、それはもういいんです。確かに、ボクが止めるべきでしたし。」

それに、ボクも食べちゃいましたしね、と。苦笑する。

「それより、水って回復薬POTで取ればいいんじゃないんですか？」

「…そうだな、取れるかも知れん。だが、取れたとしてもそれは今じゃない。」

一般的な成人男性は「安静に」していた時、一日に2.5リットルの水が入りすると言われる。内訳は食事で1リットル、体内で代謝によって生成される水が0.3リットル。飲み水が1.2リットル。尿や便で1.3リットル、呼吸や汗で1.2リットルが排泄される。

それをそのままディーブファンタジーの世界に当てはめるのは早計に過ぎるが、現状としてはそれを仮採用する事とする。回復薬POTで水分がそのまま取れると仮定しても、食事で取れる水分が無い以上、50ml（小瓶の量がその程度だ。）の回復薬が50本、健康的に我々が一日を過ごす為に必要となる。

確かに自分の腰インベントリのポーチの中には回復薬がぎっしりと詰まっている。総数は数えるのも馬鹿馬鹿しい。最後のボスの相手をする為に自作POT倉庫のコレクションを全部引き出していたからだ。

しかし、手馴れた1PTが絶望の迷宮の攻略時に消費するPOT量は、実に少ない。回復役となるヒーラーの技量にもよるが、危PT機全壊的狀況が無かった場合、近接職一人につき1〜2本、後衛職は0〜

1本程度の消耗である。保険も含めて、POTを準備する量は一人当たり20本もあれば「持ちすぎ」の部類である。それ以上持ち込むのは、かばんインベントリを圧迫する分、戦利品を持ち帰る事が出来なくなり好まれない。

まあ、最終日だからと採算度外視で詰め込んだ輩も多いだろう。だがしかしそれでも、100本、あればいい方だろう。自分は極端な例だ。

「じゃあ、なんで…」

「横で水を飲んでいる奴が居て、お前が水を持っていなかった時どうする？」

「…羨ましく思う。」

「お前の喉が死ぬほど渴いていて、そいつが分け与えるほどの量が無い場合や、そもそも分ける気が無かったらどうする？」

精々持っている奴も、1日か2日分の水POTに似た何かがあるに過ぎないのだ。

今日のペースで歩き続けて後4日間。「絶望の迷宮」から脱出に掛かる時間はそのくらいだろう。死ぬほど喉が渴くどころか、最悪、まともに動けない状態に近い可能性も否定できない。

一言一言諭すように。もし、その状況で、自分が「強者」で「暴力」で奪えるならば。

「ボクは…そんな事…」

「そうだ、だが誰もがお前みたいな奴じゃない。今、皆で分け合っで足りる量なら自分もそうしていた。」

そもそもコイツで水分が取れるか怪しい物だがな、と付け加えて一本飲み干す。苦い。体に悪い苦さだ。喉の荒れが癒され、多少の効果は見込めるのかも知れないと思う程度には渴きが収まる。

「まったく、コーヒーが恋しいな。」

「ボクはどっちかかって言うと、紅茶の方が…」

紅茶党は決して許されぬ。ボストン湾に沈んで滅ぼされるが良い、馬鹿め、紅茶党は決して滅びぬよ！何だと！等、たわいも無い話をして。

「明日からが本当の地獄だ。一日二日はまだ限界じゃない。」

「はい、マスター。」

「水だけが問題じゃない、色々頭が痛いな。」

水も食料も、集団の崩壊も頭が痛い問題だったが、今は眠る。この体でも睡眠が必要なのか、と他愛の無い事を考えながら。

邪神の広間に、人影7つ。芋虫一つ。

「まったく、腹も膨れたし、いい感じだぜえ…」

「こいつの肉、そこまで旨くねえんすよね…」

「スジばってるからな、しょうがなかるう。」

「腹に入れば同じダ」

ぐっちゃぐっちゃ。くちやくちやと下品な音を立てて男達が肉を食っている。

「おい、一応「癒し」ておけ。途中で死んでも面倒だ。」

「OKPK」

くちやくちや。ぴちやぴちや。

「フヒヒ。チャカちゃんにはお世話になったので。今からまたぐら

がいきり立ってしかたないで御座るよ」

「ぺちやぺちや。ポリッ、ポリッ。」

「あんどきや俺も連BAN食らったからなあ。アイツは絶対プチ転がす。」

「…フィルターは解かれてる。正確に言うべきだ。」

「サクッ。プチプチッ。」

「おう、アイツは絶対にぶち殺す。」

「駄目で御座るよ。拙者の獲物で御座るよ。クンカクンカした後ペロペロしてハムハムしてギュウウウってするんで御座るよ。」

「うっせー黙れ。ぶち殺した後の死体はおめーにやんよ。」

「それならそれでかまわないで御座る。拙者楽しみで御座る。今から興奮して全裸で正座待機で御座るよ！」

「さつてと、オメーら、出発の準備は出来たか。」

「うむ。」「イエア!」「準備完了ダ。」「フヒヒ、トーゼン出来たに決まってるっしょ」「OKPK」「…問題ない。」

7人の男達は、芋虫を蹴る。

「オラッ、いい加減起きろや。」

蹴られた糞虫、いや、正しくは全身をロープで縛られた少年は苦痛の呻き声を上げる。

「イギッ!」

「イギッじゃねえよ、とつとと移動すんぞ。」

ゲラゲラと笑いながら、狂気の集団は移動を始める。

獲物を求めて。絶望の迷宮を、上へ。上へ。

第六話 邪悪でも英雄（前書き）

排他表現があります。

嫌いな方は回れ右をお願いします。

第六話 邪悪でも英雄

「うー……」

昨日から意識しないようにしていたけれども、もう私の問題は限界突破の勢いを迎えそうだ。

尿意である。

水も飲まないのに自己主張が激しい。大問題である。

「おい、チャカ。朝から何唸ってたんだ。」

背後からタイタンが怪訝な表情で問いかける。

「なんでもない」

「なんでもないなら唸ってるんじゃない。そろそろ出発らしいぞ。」
いや、本当はなんでもないわけじゃない。本当は大問題である。

昨日の焼肉食中毒祭（命名ナイトウ）の後、私達に徹底されたことは「ハウレンソウ」だった。よくある、報告、連絡、相談。これの徹底だ。少なくとも何かする際は近くのレゾナンスペインのギルド員に報告し、そこからベルウッド氏に連絡を取り、相談した後に行動をするということになった。つまり私が排尿をするという目的を果たす為には2段階のクッションが必要となるのだ。ああでも！
我慢が！

結局、ベルウッド氏に直接話しかける事にした。彼は銀の戦士や刺青の坊主らの副官達サブマスと今日からの予定を話していた。そんな話し合いを邪魔するのも悪いと思ったけども、生理的欲求を抑えられなかった私はその話し合いに割り込んだ。

「すみません、ちょっと…トイレに行きたいんですけど…」

私の言葉を聞いて、ハッとされたように氏は振り向き、私の肩を掴んだ。痛い。

「それは大かね、小かね？」

「どちらにしても我々の抱える問題は、水、食料だ。」

「はい」

「そつすね…腹、減りました。」

「おう。喉が渴いてたまらねえや…」

特に魔法使い組の消耗が激しい、と白髭を蓄えた老魔術師が言う。実際の年齢は大して変わらないはずだが、長い髭と深く刻まれた皺、誰がどう見ても老年の域に達した熟達の魔法使いの姿。本人曰く「精神年齢はこんなもんだから気にしても仕方ない」等と強がっていたが、シヨックだったろう。MPを温存しておけと言ったがその後、も全力で魔法を使っていたのを思い出す。

「POTの件だが、ギルド内の状況はどうなってる。」

「10本切ってるのが8人。ほとんどが修道者です。逆に50本以上所持していたのは5名。」

「10本切ってない面子も結構昨日使ったぜ、正直俺っちのPOTも心許ない。」

「喉の渴きはどうかだ。」

先ほど銀の戦士に5本ほど飲ませてみた。コップ1杯と少しだ。

「大分楽になりました、味は酷いですけど。」

薬湯を限界を超えて飲んだような物だ。味に関してはこの際我慢

するしかないだろう。副作用があるかどうかの方が心配だ。

「副作用は…判りません。吐き気とかは無いと思います。ただちょっとドキドキします。」

「そうか、それ以上は飲むな。」

その時、所々に血と何か良く判らない汚れをこびりつかせたロブを着た、白金の髪を持つ少女が割り込んできた。何かをこらえるかのように多少内股でもじもじとした仕草が愛らしい。一体何用だ。怪訝に思い、一体何の用だと問いかける。

「すみません、ちょっと…トイレに行きたいんですけど…。」

そうか、自分は何を忘れていたのか。水の消費を抑える手段はまだあったじゃないか。がっしとその肩を掴み、確認する。

「それは大かね、小かね？」

「しょ、小の方で。」

話が早い。まずは自分で検証するべきだ。興奮を抑えきれずに更に畳み掛ける。

「多少おかしな事を頼むかもしれないが、真剣な話だ。聞いてほしい。」

いや、何もおかしくはない。おかしくはないが今までの一般常識からすると多少逸脱しているかもしれない。だがしかし必要な事だ。

「飲ませてくれないか。君の「尿」を」

直後、後ろから銀の戦士の鉄拳が脳天に飛んできた。何故だ。

「つまり、少しでも水の消費を抑えたいと言う訳だ、理解していただけだろうか。」

尿を飲みたいと言う特殊な性癖ではない、と必死に銀鎧の戦士を始めとした会議のメンバーに説明をしたベルウッド氏は、少々複雑そうな顔で私に改めて説明をした。

その最中に「マスターにそんな趣味が」とか「そんなに尿が飲みたいならボクのを飲んでください!」とか「いや、まだまだだぜ。俺たちもつと別のもイケル」「それはドン引き過ぎます」等々、酷い会話があつたことも追記。

そして、ろくな水分補給の手段が無い事、POTは水代わりになる可能性を秘めているが、何があるか判らない上に数が限られている事。

この調子でいくと後4日はかかる事。その他諸々の説明をされて、私は首を縦に振らざるをえなかつたのだ。

覗かない事、事が終わるまで出発は遅らせる事、そしてPOT5個の報酬と引き換えに、鋼鉄の兜の中に小用を済ませ、提出する事を求められた。

いや、手持ちのPOTを全部やる!やるから俺つちに!と言つていた老魔法使いも居たが、それには飲ませない事も約束させた。

物陰で鋼鉄の兜の上にしゃがみこみ、いたずらに体を締め付ける呪われた針の筵のローブの股布の部分をずらす。そこに、かつて自己主張の激しかった男の象徴は無かつた。

「うっひっひ…」

途端に心細く感じる。意識していない訳ではなかったが、この体は以前の物とは違う。だけど、長年慣れ親しんでいた自分の体のようにも思える。泣きたくなる。ちくしょう、モニタの後ろから見てたから良かったんだ。こうなる事なんて望んでなかったんだ。

チヨロチヨロ、ジヨロオオオオ…と一日ぶりの開放感が体に浸透する。

「ふう…。あ、そういうえば。」

こう、以前なら不要だったもの。現在必須な物。それは何だ。ペーパー。紙。つまり、拭く物。いや、拭かなくてもいいのかもしれないが、それは文明人としてどうよ。どうなのよ。半ばパニックになりながら周りを見る。覗くな、と強く言っただせいか、誰も居なかった。

仕方なくポーチの中から、お気に入り度が低い布装備を引っ張り出して、拭いて、しまった。なんだかもう、やけくそだった。ちよつと泣いた。

生暖かい温度と、ある種の嗅ぎ慣れた匂いを放つ、「琥珀色の液体」を入れた鋼鉄製の兜を持ち帰り、ベルウッド氏に差し出す。

「ふむ。ありがとう。」

これが報酬だ、と5個の回復薬を手渡される。でも本当に飲んじやうのですか。ソレを。複雑な心境になりながら豪奢な修道者ベルウッドを見つめる。

彼は神妙な顔をして、暫く両手で杯を持つようにし、兜の中身をまじまじと見た後、グイッと飲み干した。イツキだった。

尿は汚い物といわれているが、実際に体外に放出され、尿素が雑菌に分解されてアンモニアを発生するまでは決して不潔な物ではない。(ただ、飲用に適しているかは別問題で、長期間の飲用は健康を害する。)

しかし、だ。知識としては知っているが、実際にドン、と目の前に置かれたら、躊躇する人が殆どだろう。

自分もそうだ。

これは…確かに、厳しい。厳しいが、何かを期待するような視線を目の前の少女から受ける。

こちらから提案した事だ、これを「やっぱ無理だ」といって突き返す事は出来ない。しかも、自分が出来なければ、他の面子に提案する事など不可能だろう。

「俺は飲めないが、お前らは小便を飲んで生きる。」と言える精神を持っているなら、自分の代わりに言っしてほしい。

覚悟を決めた。少しの逡巡の後、目をつぶり一気に飲み干す。不味い。

渴いた喉を潤し、胃に入る液体は確かに不味かったが、水分だ。

「マスター！POTです！」

「不要だ。飲みたくない奴は飲まなくても良い、と一応断ってから

通達しろ。」

はいつ、といつもは元気よく答える副官は白い目で自分を見る。

「ボクが言うんですか。」

不貞腐れたように自分を睨む銀の戦士と、羨ましそうに見る老魔術師。困惑した表情の刺青坊主と、顔を真っ赤にした白金の髪の少女を見回した。

「矢張りこれも自分の仕事か。」

その場に居る全員が頷いた。仕事ばかりが増えていく。

「諸君らに提案がある。」

無駄に偉そうで、無駄に威圧感がある、それで居て従わざるをえないような、そんな王者の風格を醸し出す修道者が、出発前に言う。シン、とした空気が生まれ、ざわめきが止む。

「尚、この提案も拒否してもらっても構わない。」

ダン、と戦棍を地面に付きたて、一拍の溜めを置く。

「だがしかし、一考して欲しい。」

更に溜める。何を提案するのか。ざわめきが広がる。

「尿だ。排尿の際に水分を無駄に捨てず、それを飲む事を提案する。」

「ザワツと広がるざわめき。「そりゃ無理だ」「うへえ」等の否定的な言葉が飛び出す。当然だろう。だがしかし、更に続けられる。」

「実際に自分は既に飲んだ。また、遭難した場合に「飲めた」奴ほど生還率が高かったという話もある。諸君らはどちらだ？」

どよめきが広がる。生還率と聞いて脳内の算盤をはじく奴らも増える。「容器はどうするんだ！」等の野次も飛ぶ。

その演説の最中、私は羞恥の余り下を向いて、プルプルと震え続けていた。確かに飲んだよ！奴は飲んだよ！くっそ！私のだけどな！くっそくっそ！

そして、他人のを飲むのと自分のを飲むの、精神的障壁はどっちが低いのかと言う疑問譜は浮かぶものの、ヤツは絶対に生き残るタイプだと確信した。くっそ！

「飲む事」を選択した人は結構な量になった。ただ、選択した人の光景は説明を省く。

人間追い詰められると結構なんでもするね、と思った。

その後、行進を始める。特に変わった事というのは無い。ただ淡々と進み、ただ淡々と魔法使い達が引つ張られてきたMOBを「処理」し、また、淡々と進み続ける。

ただ、昨日と比べると処理が明らかに遅くなっていた。魔法の密度が薄くなつて来ている。「飲まない選択肢」を取った魔法使いが

遅れを生じているのだ。

そして、私も止まらない頭痛に襲われている。

ふらふらと歩く様が痛々しい、とナイトウが手を引く。

更に火力密度が下がる。

悪循環だ。

怪我をした際やその他の緊急時以外にPOTを飲む事は「今は」やめるように言われている。

この集団を例えるなら、召還された「幽鬼」の群れだなあと思いつつ、2日目のキャンプポイントまで進む。

ただ足を前に出す事だけを考えていた。

そして、2日目のキャンプが終わる。

3日目。

ベルウッド氏が、「POTを飲む事を許可」と発表した。

もうこの辺りになると、全員が全員、無駄口を叩く気力もなく、

正に幽鬼という状態。

全員が程度の差はあれ脱水症状を訴えていたのだ。

一度に5本まで飲んでよく、空き瓶は捨てずにポーチの中へ入れる事、とされ、朝昼晩の3回まで、とされた。

また、「飲めなかった」人ほど酷い脱水傾向にあった。

飲む人ほど生存率高いのはそうなんだろうなあ。という謎の実感を抱きつつ、私は飲めない組だった。どうしても拒否感を押さえられなかったのだ。

そうになると、私の回復薬は一回目でなくなってしまう。どうしよ

うと思つていたらナイトウがくれた。「こ、子供は我慢すんな」と言う。

その代わり小水を要求された。
無言でぶん殴つておいた。

お前もか、ナイトウ。

一応ギブ&テイクの関係は保ちたかったので、あげました。喉が渴いていたのと頭が膿んでいたお陰か、美味しそうに飲んでました。色々トラウマです。

POT解禁のお陰か(たいていの人は1日で飲みきってしまったようだけれども)全員がまた気力を取り戻して、進む。進む。

空腹は閾値を越えると、急速に感じなくなった。その代わり力事は余り入らないけれども。空腹も感じすぎると別の脳内物質が発生するのか。

魔法使い陣の火力密度は2日目よりも薄くなり、所々打ちもらしが出てくるようになった。

まだ、側面に展開した戦士の弓矢が間に合う程度であるけれど、いつか事故を起こすと思う。

ベルウッド氏のしかめっ面は昨日に比べて酷くなっていた。
そして3日目のキャンプも終わる。

4日目の朝になって、その事件は起こった。

ひいひい、はあはあ、息が乱れる中、流れ出る血と痛みを耐え、
希少回復薬^{GOPOT}を飲む。即座に塞がる傷。「影渡り」を駆使して影から影へ。

「イヤッホウ！ やっぱりPKはこうじゃないといけねーな！ 糞つたれなりア充PTは皆殺しだあ！」

全く目立たない、若い暗殺者の男が叫ぶ。唯一目立つとしたならば、その目だろう。その目に完全な狂気の焔を宿していなければ、いつそ善良なと表現してもおかしくない。その暗殺者の男が。嬉々として両手に装備したダガーで、あたしの大切な人たちを刺し、切り、捻り、抉り、解体する。

「前の輩は真性の一匹狼^{ソロ}の武人だったからな。チュイオ、貴様が邪魔しなければもっと燃える死合いができたろうに。」

鍛え上げた一本の妖刀のような雰囲気を持つ、片目の武者が憤怒の表情を崩さず、傍らの異常に下品な派手派手しい装備をまとった魔法使いに吐き捨てる。

「…ムシヨ、貴様が一騎打ちに拘らなければ即決着はついた。無駄な時間をとった。」

小ばかにした口調で返す、その魔法使い。身内にも容赦が無い言いは不快感しか感じれない。価値観を共通できない人同士で、なんで一緒に居るんだろう。

どうしてこうなったんだろう。もう何日前に、「一緒に行こう」という誘いを断ったのが原因だったのかな。

「OKPK」

痴呆のような表情を浮かべたその様は、まるで全てを許す神の使者。

「オケピケじゃねーよ、おい、ニクマンも！いつまでも食ってるんじゃないよー！」

筋骨隆々としたデザインが多いMMOの中でも、一際異常を放つ、アバター全ての外見のパラメータをMAXに振ったような巨魁が、何かをムシヤムシヤと食べている。何を食べているのかは想像したくない。

それに傍若無人な蹴りを入れた男は、全てを飲み込む漆黒。黒い獵犬。まるで機械で鍛え上げたかのような整った筋肉、無駄の無い動き。

「ゼロちゅわああん、このPT違ったで御座るよお。チャカたん居ないで御座るよお。」

その男の異様さ。粘つくような口調。まるで女のような顔と極めてバランスの取れた成人男性の骨格。だが、女性向けの、呪われた針の筵のローブを着用したその体は、外装の鎖と針で常に血に濡れている。

「おうよ、女1男4のPTだったからアタリと思ったがなあ。しょうがねえ、行きがけの駄賃だ。おいシゴ！「不完全な復活」でもう一度殺つとけ！」

最初に、一緒に行きませんか？と話しかけられた時に、あたしも賛成すればよかったのだ。BOT野郎ベルウッドと一緒に行くのはどうも怪しい、と主張しなければ良かったのだ。POTが山ほどあるから、水が無いなんて嘘っぱちだと言わなければ良かったのだ。

その結果が、これだ。

後ろから突然襲われた。

不意を撃たれた私達が、反撃の態勢を取るまでに2人死んだ。

3人目が殺られた時に、あたしは全力で逃げ出した。

4人目が絶叫を上げる中、あたしの背中にブスリと何かが刺さった。

刺さったけど逃げた。必死になって逃げた。流れる血が目印になって追いかけてくるんじゃないかと、傷をPOT使った。ふさいだ今でも恐れている。兎に角走って、走って、走って。

何時間走ったか判らないけれど。

走った先に、集団が見えた。

あれが、あたしを助けてくれると、いいな。そう思った時に、意識がなくなった。

第七話 「かばう」が使えるから英雄（前書き）

聖水ネタが嫌いな人はとりあえず進まない方が良いかと思えます。

第七話 「かばつ」が使えるから英雄

4日目の朝。私達は起き出す。回復薬P.O.Tがあるものはそれを飲み、無いものは羨ましげに横目で見る。

それから大多数の人が『聖水』を作成し、飲む。

とある老魔法使いが『聖水』と呼ばば飲める輩が増える、と昨日の昼頃の休憩で謎の演説をし、私達の中で琥珀色の液体は『聖水』となった。老魔法使い別の意味で勇者は昼の休憩だけは飽き足らず、行軍中も延々と語り続けていた。最早その時は誰も聞く耳を持たなかったけれども。

私も結局、最終的には「飲む事」を決意した。様々な葛藤があったけれども、頭の痛みと喉の渴き、体を襲う脱力感には耐え切れなかったからだ。

「これは聖水これは聖水これは聖水……」

ブツブツとつぶやきつつ、目をつむり、鼻をつまみ。呷る。自分の体の中にあつたものだから汚くない、汚くないと念じながら。

半端に残すと後がキツイ、とヤミカゼは語っていたので、一気に飲み込む。味わうな。飲み込め。とタイタンは警告する。ナイトウは、喉が渴いていたら気にならんべ、細かすぎるんだ、と笑っていた。大物だ。

時間が経った『聖水』はとても飲めた物じゃないと言う事は、空のP.O.T瓶に入れた後、道中で飲んだチャレンジ魂溢れる猛者の様

牲で判明した（判明というか自明の理だと思うが）。幾ら喉が渴いても無理だったようで、道中で飲んだ猛者は毒霧を噴出し、周りの者から総スカンを貰ったのは言うまでも無い。

「作成」直後に「使用」しない場合は、廃棄すべし、と改めて4日目の朝にベルウッド氏が念を押す。

「後2日だ。皆、頑張つて欲しい。」

ベルウッド 豪華な修道者の体には疲労の色が透けて見える。彼に限らず、私達全員、酷い格好だと思う。その中でも、声の張りを失わないのは元々の性質か、それとも英雄キャラクターになったからなのか。

恒例の『通達』の締め言葉が終わり、皆が出発しようとした時。

重たい水袋が地面に叩きつけられる、そんな異音が私達の後方で聞こえた。

「おい、しつかりしろ。」「意識ねーぞ。」「寝てるのか？」
銀の副官から後方で異音があった、との報告を受けて搜索すること約10分。目の前に運び込まれてきたのは女暗殺者だった。

「シルキーさんですね。PTで不参加の意思表示出したトコの子です。」

刺青坊主が思い出す。そういえばそんな奴も居たな、と言う程度の印象だ。自分と関わりが薄かったので、その他大勢で括っていた

タイプだ。

「そうか、で、これはどう見る。寝てるのか。」

「わかんねっす。寝てるなら『穢れ払い』で起きると思いますけど。」

「それも道理と「穢れ払い」を発動させる。暖かい光は、彼女の体を巡る。穢れを癒す光は、眠りすら吹き飛ばすはずであった。」

「起きんな。」

「状態異常じゃない、と言う事もあるんじゃないですか？」

異常な「眠り」や「意識喪失」は癒す事が出来る。また、極めて一部の状態異常は「穢れ払い」や「美味なる果肉」等の状態異常回復スキルでも回復は不能である。しかし、それとはまた別のケースだろう。癒せない例の一つとして覚えておくべきだ。

「呼吸と脈拍、普通にあるみたいです、マスター。」

「ふむ…。」

「どうするか。ここに置いて行く？ありえん。起きるまで待つ？もつとありえん。ここで悩み続けるのも時間の無駄が大きい。自然と、口に出してしまう。」

「背負って連れて行くのは…むう。」

悩み始めた自分を見かねたのか、白金の髪の少女を連れ魔法使いが前に出た。

「あ、あの。タ、タンカ作ったらいいんじゃない？」

それならやってみろ、出来たら出発だ。という言葉で、オレの周りに人が集まる。

「おう、ナイトウ、どうやって担架なんて作るんだ。」

タイタンが興味津々とオレに話しかけてくる。何いきなり話しかけてきてるわけ？オレアドリブに弱いつて言ってるじゃん。

「じ、自慢じゃないがオレは光属性の、り、リアル修道者属性、だからこの手の作業なら任せておけ」

実際はオレ、ニートだけど。口に出していったら当然のごとくもった。つかえつつかえで振ったネタが理解されない悲しみに襲われる。

インベントリ
かばんから予備武器の「神風の錫杖」と「原理の杖」、どちらも約2mほどの杖装備を取り出し、更に「燕尾服」と「星屑のロープ」を取り出す。全て伝説級装備だが既に伝説級の装備をしているオレには関係が無い。両方のロープをさかしまにし、裾に杖を通していく。両裾に杖二本を差し込み終われば簡易担架の出来上がり、だ。

「もう出来たのか。」「はい！」「きた！担架きた！」「メイン担架きた！」「これでかつる！」

「うはっ、おけっ」

満面の笑みを浮かべたオレの心の中はwで埋め尽くされていた。皆判ってるじゃん。振ったネタに答えてくれるのは最高だ。

「で、誰が運ぶの？この人。担架だから2人必要になったけど。」「天使チャカの一言がオレを現実に戻した。そういえばそれは考えてなかった。正に片手落ち。どうすつべ、だからオレアドリブ弱いんだつてば。

「ああ、オレらが運ぶわ。何だかんだで『貢献』できてないからな。」
「
ネクロンを筆頭とした中央組が申し訳なさそうな表情で申し出たので、それじゃあ、任せたと話ほとんどん拍子に進み、オレ達は4日目の行軍を開始したのだった。」

「あ、ナイトウさんってお医者さんか何かツスカ？」
ヒゲダルマが尊敬の目でオレを見る。周りの皆も釣られて尊敬の目で俺を見る。

「にゃ、ニート。まじうこと無きニート。さっきの装備の廃ッぷりからも判るでしょ。」
その場をぶち壊しにしたのは、小悪魔^{チャカ}だった。オレ、こいつに同情すんのやめようかな、とか一寸思う。周りの視線はいつものオレを見る物となった。ニコつと笑みを浮かべるチャカ。どうせ、オレがいい格好をしたのが気に食わないのだろう。

でもオレが見捨てたら、こいつ死にそうだしなあ。はあ、と溜息をつきながら、また手を引き、歩き始める。

後2日。それでこんな不自由な生活からはおさらばだ。

静かに獲物を狙う、獵犬7匹、芋虫1匹。

「うっし、楔は打ち込まれた、と。」
自信満々、唇の片方を吊り上げ、にやりと笑う。

「…足止めに失敗していないか？」
静かに、それで居て苛立ちを隠しきれない声での叱責。

「あの女が目を覚ましたら、警戒されるだろ、奇襲成り立たねえよ。」
わざと取り逃がした事を見抜けずに、責める言葉は一丁前。

「うむ。取り逃した事は仕方が無い。どう殺るかが問題だろう。」
ガチャリ、と大太刀を構え、今にも駆け出すかの武者を抑え。

「ばっか、今突っ込んだら全滅だぜ、俺らが。もう一寸頭あ使え、頭。」
「つまり、どういう事だ？」

未だ、謎の肉を食らい続ける巨魁が疑問の声を上げる。黒の猟犬を全員が睨む。

皆、疑問に感じていたのだ。首領と全員が認めている訳ではないこの男の思考を。だが、皆が認める。今も昔もこの男の卑劣の度合い、この場に居る誰にも負けぬ事を。

「奴らが俺らを「狩る」つもりなら面倒くせえ。だけどそんなときゃ、俺らは迷宮の奥底に引っ込めばいいだけの話よ。」

全員頷く。当然の道理。「絶望の迷宮」はその名の通りの「迷宮」ミヒリントス

出る道は一直線、しかし、奥に進むのは枝分かれした行き止まりの道が何本も在る。邪神の広間に出るならば定まった道筋だが、それ以外の小道に逃げ込めば隠れ潜むのは容易であろう。

「だがしかし、奴らは俺らを狩る事ができねえ。制限時間付きだからな。」

あれだけの大人数、水と食料を真つ当な方法で確保する事など、出来やしない。

「奴らの選択は、何を聞いても「脱出」だろうよ。だが、奴らは大人数、しかもお荷物を抱えて足が鈍ってやがる。何でもいいから脱落者が出た時点で、そいつからしゃぶっていけばいい。」

「それもそうだ。その為の楔。しかも毒付きだ。混乱を巻き起こす毒付きの楔だ。」

「OKPK」

全員が判った風に頷く。

「義憤に駆られた雑魚が先走ってくれる事が、一番都合がいいけどよ。」

「にやり、と笑う。好敵手ライバルの思考を読む。相手は歯牙にもかけて居ないだろうが、それでもいい。俺が認めていればそれでいいのだ。」

「あのベルウッドだ。そこまで都合は良くいくめえよ。まあ、最悪、出口で仕掛ければいい。絶望の迷宮の入り口でぐちは地面に開いた大穴さ。」

「チャカちゅわあああん…。」

「おう、シゴ。テメエの愛しのお姫様は俺の獲物でもあるからよ。まあ、見てるよ。引つ掛けてやるよ。」

「それに、俺らは全滅してもかまわねえ、そうだろう?」
全員が密かに笑う。破滅的な笑い。狂っている。

「あいつ等、進み始めタ」

「おう、それじゃあ行くぞ。気付かれるなよ。」

太い縄で括られた少年を引き摺る。苦悶の声が漏れる。

「うるせえよ。」

猟犬のつま先が柔らかな腹にめり込み、呻き声は止まる。

猟犬7匹、芋虫一匹。密かに、密かに歩を進める。

今日を乗り切れれば、明日の夕方にはこの鬱屈とした、空が見えない迷宮から脱出出来る。それだけを信じてこの陣形を保持する。守られるだけ、それに負い目が無いわけじゃない。少しでも攻撃手の負担にならないように。不満を飲み込み、担架を運ぶ。弓手の射線を塞がないように。

今日の戦闘が3度を数える頃、担架の上の人は目を覚ました。

「PK？」

大抵の変化は厄介事と一緒にやってくる。その言葉を聞いた時、いやあな予感がして堪らなかった。

いわゆるMMORPGの最終的な遊び方は大体3つ位に分かれる。エントトコンテンツ
ご多分の例に漏れず、LVレベル上げが終わったら、ディープファンタジーもこの組み合わせで遊ばれていた。

一つ目はAvatarChat、仮想の自分を演出しつつの日常の雑談。極々真つ当な時間しか裂けなくても、適当にお友達とダンジョンに潜りながら雑談に興じているだけでも楽しい物だと思う。

二つ目はHack and Slash、ただひたすら稀少な装備を求めて各地の迷宮にもぐり続ける。伝説の装備は出ないから伝説なのだ。理論上の最高値を求めてひたすらMOBを狩り続ける。目当ての物が出た時の興奮は物凄いから。

三つ目にPVP、だ。

対人戦、ギルド戦、戦争、色々な呼ばれ方をするけども、最終的に意味する物は同じ、他プレイヤーとの戦い。誤解を恐れずに言うと、モンスター相手は絶対に勝てるけれど、プレイヤー相手の場合は勝てるか負けるか、それが全く判らない。だからこそエンドコンテンツに成り得るし、のめりこむ人は多い。装備やスキルの組み立て方はMOB相手と根本的に異なるのもまた、面白い。単純な攻撃力と防御力、単位時間当たりのダメージだけでは決まらない結果がそこにある。そして、PVP慣れた人とPVP慣れをしていない人の間では、LVや装備で計れない実力差があるのだ。

そこに堪らない魅力を感じる人も多い、でも、そこにどうしようもなく馴染めない人もまた、多い。

誘われれば参加する程度の私でも、全く対人慣れしていない人相手なら「以前なら」無双できる。極まった歴戦の猛者なら、それこそ一発も被弾せずに封殺するだろう。たとえ、多対多でも初心者と熟練者が敵対した場合、陵辱レイ辱と言ってもいい位のワンサイドゲームになる。

では逆に陵辱レイ辱された側は？

ちくしょう、ファック、やり返してやる、と奮起するか、もうこんなゲームやらないとほうりですか。そのどちらかで。後者を選ぶ人は非常に多い。

「極々真つ当な、双方同意の上でのPVPですらこんな感じなのだ。
ディープファンタジー
今までの世界ですら、そうだった。」

「あたしの仲間が、皆殺しにされたの！だから、だからあ…」

「助けて、と彼女は言った。仇を討って、とも。」

「だけど、自分も戦うとは一言も言わなかった。」

「論外だ。」

「話は聴いた。ただ、それだけだ。馬鹿馬鹿しい。」

「なんでえ！どうして！助けてよあ！」

「泣き叫びながら女は喚く。五月蠅い。そもそも、何故最初に自分を信用しなかったのだ。」

「マス…」

「銀の副官が同情的な意見を述べようとしようとしているのは判る。だが、それを遮る。」

「話を聴くと、手馴れた対人狂が7人。ならば、我々のギルドから倍数出し殲滅したとする。」

「ここまでは確定事項だ。自分達こそがこの世界最強集団。それは例え、苦痛を感じるこの体であっても間違いは無い。この強行軍、
レンナンスベイン
自分達のギルドが最も統率が取れ、一つの集団として纏まっている。以前の仕様と今の仕様、差はあれど、最強の座は揺らがない。だが、

しかし。

「彼らをどう『帰還』させればいい。答える。」

「マスター……」

哀れに思わないことは無い。同情できない訳でもない。だが、冷徹な状況がその感情を許さない。

「あ、あたしの所持品アイテムなら全部だすからっ！お願いだからあ！」
安すぎる。理解できていないのか、この女。どれだけ法外な値段をつけてもこの状況では、安すぎるのだ。

86名の命を天秤にかけるのに、財産カネでは、安すぎるのだ。

「時間が惜しい。進むぞ。貴様も同行したければするがいい。」
強引に打ち切る。自分の予想が正しければ、奴らはもつとえげつない手段で熱量カロリーを得ている。一度は考えたが、まともな人間なら拒否するだろう、その手段。

「PKいぶだけで済んでれば、まだマシだろうがな。」
殺した相手のPOTを奪い、それで生命を保っているなら、まだいい。だがしかし、その先の手段をとっていた場合は。

自分は人間として、許しておけるのだろうか。

その後の行軍は、重かった。

しくしくと、静かに響くその泣き声。嘆きバンシーの妖精の泣く声は私達

の良心に棘となって刺さる。

栗髪のシルキー女暗殺者は時折、後ろを振り返る。目を真っ赤に腫らし、流れる涙をぬぐう事を忘れたその様は、まるで幽霊。それをずっと続けられたのだ。

4日目の終わり、睡眠を取る場所で「焚き火」を炊く。意味の無いアイテムだけど、こういうときは便利だとしてここ数日の経験で思う。わたしたちザ・フールは真夜中担当の見張りだった。

「そういえばシルキーって、どっかの国の幽霊だっけ…」

「イ、イギリスの幽霊、でもホントは絹のつもりでつけたんだと、お、おもう。」

げっそりした声で答えるナイトウも力ない。悲痛なあの泣き声は心を折る。ヒゲダルマは何かと彼女に話しかけたりしていたようだけど、もう何の反応も無い。ただじっと、進んできた道を見ているだけだ。

「明日には…出れるよね。」

「うんだ、明日にゃ出れる。この辺り記憶にあるからな。出れるべ。」

明日の夕方には、きつと空が見える。水も…きつと、ある。いい加減お風呂に入りたい。洗濯も出来るならしたい。でも、心配なのは。

「PK、来るかな。」

「…オレがPKなら、こんな集団は襲わない。少なくとも別ゲでやってた時は、もっと襲いやすいヤツを狙ってた。一匹狼とか。そんなの狙うべ。」

幼子をあやすように、頭をぼんぼんとなでる。いや、私外見と年齢と性別一致しないから。最近こんな扱いが多い。多少憮然とする。

「おう、お前ら。そろそろ交代だ、寝ようぜ」

タイタンとヤミカゼも酷い格好だ。無精髭が伸び、服は垢じみてきている。

「おっけ、それじゃ次の人達起こしてこよっか。」

「タ、タイタン。あの子きっちり見とけ。シルキーさん。」

他人の心配が出来るなんて、余裕あるねと思う。私は私自身の事で手一杯なのに。

「ん、、ああ、OKだ。」

まあ、何も無いだろうけどもよ、一応だべと。

その時だった。

泣き女シルキーが、ありえない者を見たかのように立ち上がる。歓喜の表情を浮かべ、通り過ぎた迷宮の道に向い、駆け出す。呆然とそれを見つめる私達。

「へっ？」

何が起きたか、理解するのにたっぷり10秒。

「…まずいつ」

ナイトウが「飛翔」を発動させ、追いかける。空を翔け、一気に女と距離を詰める。更にそれを追いかける私達。

その先にあるのは人影。生気の無い男の頭。首から下は外套に覆われ、確認できない。

女が外套に抱きつく。揺らぐ外套、落ちる頭。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あ！」

追いついた魔法使いが、絶叫するシルキーを地面に引き摺り倒す。
全身で覆いかぶさり、何かから守るように。

私がそこに見たものは、良く知っている、骨で作られた強大な死
の竜。

命無き口ががばあと開き、喉の奥から溢れ出す冥府の炎。咆哮と
共に吐き出された赤橙の炎は、効果範囲外の私すら撥ね飛ばす猛烈
な勢いで叩きつけられる。

粘つく一面の炎。私は「死竜の火炎」がナイトウを焼きつくすの
を止める事が出来なかった。燃えさかる人型の松明。悲鳴の一つも
上がらない。

「え、うそ」

そんな、呆然とする私の前に現れたのは私がよく知っている、あ
の男だった。

「チャーカちゆうわああん、みいいつけたあ」

死霊使いは粘つく笑いを浮かべ、実に楽しそうに言っているのであった。

第八話 混乱しても英雄

少し真面目に話そうと思う。オレの過去の話だ。

オレにとって、ゲームは趣味の一つであった。

そんなオレがネットゲーに出会ったのが大学1年の春の事。「全員が英雄」というキャッチフレーズな某ゲームに嵌り、そこからズルズルと様々なネットゲームに手を出した。

当時はネットゲームというだけで持て囃されたのだ。色々なクソゲーもあったし、そんな馬鹿な！というシチュエーションのネットゲーもあった。オレは嵌りに嵌って、大学を2留した。退学しようと思った。

オヤジに「父親が死んだ時より悲しい。お前がそんな情けない事を言い出すとは思わなかった。せめて大学だけは出る。始めた事は最後までやれ。」と大泣きされ、オフクロには「史郎、知識は決してお前を裏切らないよ。」と泣かれた。

仕方が無いから、色々な教授に頭を下げてギリギリ卒業した。程よくネットゲーをしようと誓いを立てたのもその頃だ。しかし、世の中は正に就職氷河期、勉強した事など生かせそうも無い。全く畑違いの警備会社に入社して、警備員になった。

ガードマンオレの誕生だ。

2年目のオレの職場はデパートの地下1F、様々な食料品店が入っている場所だった。つまらない仕事だと思っていたが、その日は違った。

リストラか何か知らないが、社会に恨みを持った（と言う主張を裁判でしたらしい。）男が、刃物を持って大暴れしたのだ。

たまたま買い物に来ていたオレのオヤジとオフクロは、巻き添えだった。オフクロが出刃包丁で刺された時、オレの足は竦んで、動けなかった。オヤジの足は竦まなかった。男を止めようとして刺された。その後オレも刺された。

助かったのはオレだけだった。新聞の三面記事にでかでかと載った。新聞に載ったのは初めてだった。うれしくは無かった。

その後会社は辞めた。現実世界にオレの居場所は無かった。またオレはネットゲーに嵌った。ゲームは趣味以上になった。

命ある限り、体が竦んだりせずに、巨大な魔物HPに立ち向かい続けれるディープファンタジーの英雄はオレの理想だった。それでも最前衛に経ち続ける戦士は怖かったから、魔法使いになった。ちよつと理想から離れたけど、それでも良かった。

そんなオレの今は、現実がゲームだ。これは悪夢なのかもしれないが。

天使チャカがPKを心配とおりましていた。

こんな大人数を襲うわけが無い。そう言って安心させた。人数は

精々1PTに毛が生えたような物。少しでも理性が残っているなら絶対に襲わない。理性を無くした相手ならそもそも被害が出るわけが無い。そう、オレ達は対人戦の経験がある。PKは人だから恐ろしいのであって、理性を無くした獣は恐怖の対象ではないのだ。

だけど、どこか見落としてる気がしてならない。オレの本能が警鐘を鳴らしている。

経験から語らせてもらうが、PKをする際に大事な事は何個かある(ディープファンタジーに厳密な意味でのPKは存在しない)。不意打ちをする事。多人数で少数を襲う事。襲う際に敵のスキルを封じる事、逃げる相手の足を潰して、逃がさない事。そして、襲った場所に留まらない事。大体どんなゲームのPKでもこの辺り、当てはまるんじゃないか、と思う。

ちょっとまで、泣き女シルキーは何故逃げる事が出来た？

いや、取り逃がす事もあるだろう。たまたまMPが切れてた、他の面子に手間取ってた。色々要因はある、気のせいだと思う。構成がベストでない事もあるだろう。

じゃあ、もし逃げてもいいと思っていたら、こうは考えられないか？これは奴ら流の「宣戦布告」と言う事か？もしくは、自分達を討伐するPTでも編成させて、分断させようとしたのか？

どちらにしても考え過ぎかもしれんべ、と思考を中断し。

「タ、タイタン。あの子きっちり見とけ。シルキーさん。」

まあ、何も無いだろうけどもよ、一応だべ。

「へっ？」

視線を少し外した、一寸の事だった。その女暗殺者シルキーが人影を見つけて走り出したのだ、と理解するのに10秒掛かった。

「…まずいつ」

嫌な予感しかしない。何でこんな不自然な人影がここにある。首から上しか見えないのは何故だ。

昔見た映画で、こんなシチュエーション無かったか。アレを動かしたら、ボーン。って。

少し予想は外れた。目の前に巨大な骨の竜が居た。目の前に人が居た。抱きかかえて地面に転がった。

「ごう、とオレの体を炎が包んだけども、たいした問題じゃなかった。

やってやったぜ、オレ。今度は足が竦まなかった。

「え、うそ」

ナイトウは動かない。蛋白質が燃える異臭。異様な赤黒い炎がナイトウの体に巻きついている。

「ナ、ナイトウ？ちよっと、ねえ！待ってよ！」

火を消さなきゃ。ナイトウの体に付いてる火を消さなきゃ。燃えさかる人型の松明になって動かない、親友の。

その時、体が凍った。

私の前方には、一人の奇妙な男女が居た。ある意味よく知っている、ある意味全く理解できないその相手は、昔私に、「すみません、お友達になりませんか」と耳打ちをしてきた男。名前は、確か「3333」。既にBANされている相手のはずだった。

蛇に睨まれた蛙。モニターフィルター越しでも十分に感じていたその粘着質。心底キモチ悪いその視線。

火炎を吐き終わった骨の竜はガラガラと砕け散り、砂と化す。その不気味なオブリエを背景に実に楽しそうに笑う。

「ちゃーかちゅあああん、そんなのほおっておいて拙者とラヴラヴチュツチュするで御座あるよお」

実に楽しそうに、恋敵は消えた、俺の元に来いと言わんばかりの満面の自信を顔に浮かべる奇人と、蛇に睨まれたように動けない変態。

俺が、その均衡を崩す。

「ヒール遅いぞッ！姫ネクロ！くそがあッ！」

そう言つて「迫撃」を発動させ、駆ける。追従するヤミカゼは「影渡り」を使い「333333」の影を取る。手馴れた瞬時の連携だった。

一步、二歩、三歩、風を蹴り、物凄い距離を瞬時に詰め、大上段から一気に片手剣を男女に叩きつける。同時に暗殺者の「腎臓打ち」が背後で炸裂する。暗殺者の対人用スキルの中でも特に強烈なその一撃。全身の力を螺旋状に乗せ、背後から相手の腎臓を破壊する必殺の一撃。その二重の猛攻にサンゴは血反吐を吐いて倒れるはずだった。

「吹き荒れる、「氷の嵐」」
その場に割って入る、新たな声。ごうつと空気が圧縮される。俺と不気味な死霊男女使いの胸元で瞬時に圧縮される高圧の冷氣。瞬きする間の後、猛烈に吹き荒れる嵐は俺もヤマカゼも、そしてサンゴをも切り裂き、吹き飛ばす。赤い血が渦巻く冷氣に凍結され、氷の弾丸となって回りに散った。

「…シゴ、お前は油断し過ぎだ。」
新手だった。こいつは知らない奴だ。

「フヒビ、サーセン。チュイオは乱暴なのが珠に瑕で御座るなあ。」
全身に血の氷を貼り付けながらも粘着性は失わない、その視線は俺を決して見ない。チャカ一点に注がれている。こいつら、ナメてやがる。

更に奥に数名の人影が見えた。ああクソ。新手か。

タイタンの怒声で金縛りが解ける。戦士は敵を止める。魔法使いは敵を削る。暗殺者は敵を倒し、修道者は味方を癒す。じゃあ、死霊使いは？

そうだ、状況に応じて万能に動けるのが死霊使いの長所じゃない、今ここですべき事は治療ヒーラー者の役割だ。私の役割はこの場では治療に徹するべきだ。

未だ燃える親友ナイトウの元に走り、触れる。熱い。手が焼ける。我慢だ。男の子だろう！

願え、癒せと！「美味なる果肉」よ、と！

祈りが通じた。「美味なる果肉」はゲーム時代の通りのエフェクトを撒き散らす。全身から噴出する毒々しい紫の光はそのまま、まるで遊んでいる時と同じ感覚。

出来た！私も出来た！

ナイトウ、今助けるから、待っていてくれよ。焼ける手の平は痛かったけど、私は誇らしい気持ちで一杯だった。姫ネクロなんて言ったタイタンは後でしばきたおす。

私はその時まで、死霊使いの仕様がどういうものか、忘れていた。何故今まで発動しなかったのか、何故発動したのか。検証する時間も無かったのも事実だけど、想像ぐらいしても良かったのだ。

発動時のHP減少がどういう扱いになるか、ぐらい想像しても良かったのだ。

接触しても、何も起きない。手に触れても何も起きない。じゃあ顔は？

触れた瞬間ナイトウが、野獣ケタモノに変わる

オレの全身がバチバチと燃える。全身を襲う熱と痛みにも声も出ない。チャカが寄ってくるのは白濁した視界からでも見えた。いや、おめー、火傷すんべ。もう無理だから寄るんじゃね。触んじゃねえ。いらねー怪我すつから。まあほら。アレだ。きつと「蘇生」してくれるだろ、ベルウツドの野郎が。ああもう、だから。

その時、毒々しい紫の光が天使チャカから立ち上っているのが見えた。

溢れ出す赤葡萄ジュース。桃の果肉に葡萄の果汁！

なんて美味いんだ！

思えば数日ぶりに口に作る、果物。もっと喰いたい。噛み締めれば噛み締めるほど、糖度の高い果汁が溢れ出す。少々堅い種のような部分もあったが、それもまた美味。コリコリとした食感がまたそる。ごくりと飲み込み、次の部分へ。気が付けば全身を覆う炎は消え、火傷で炭化したはずの箇所にも肉が盛り上がり、薄皮が張り、更なる力が湧いてくる。

なんて素晴らしい！もっと食べよう！

「<>><??*☆— || || !! # \$ % \$ \$ \$! ” # ! % % % %
！！！！」

飛び付き、白い果肉を更に食む。桃の癖にイキがいい。飛び跳ね暴れまわる桃を取り押さえる。黒い皮革で覆われた部分は硬い。金属の鉾と鎖で覆われている。暴れる桃。しっかりと押さえつけて果肉の多い部分を探し、噛み付く。毛は美味くない。逆向きにした。大根が2本生えている！これもうめえ！うめえ！

そしてオレは数日ぶりの食事を済ませた。

正気と体力を取り戻したオレが見た物は。

何だ？これは？

そこより少々離れた場所で、笑う悪魔4匹、芋虫1匹。
後は笑わぬ悪魔が1匹。

「OKPK」

「ゼロよ、仕掛けるのか？今なら4人、殺れる」

突き詰めたら単純な作戦。見張りが3交代、約25名。女を釣餌に、引つかかった奴を範囲魔法と飛び道具で潰す。残った馬鹿どもが少なければそのまま轢き潰せばいい、多ければ誘い込んで持久戦だと言う黒の猟犬。

猟犬が予想外だったのは、餌に掛かった獲物の少なさと、掛かった獲物。後は死霊使いの早漏っぷりか。いや、タイミングを狂わされたのは獲物の魔法使いの反応が良かったからか。

「おいおいアレ見るよ、リヨナゲー真っ青じゃねーか！クツソおもしろえ！」

「あんな犬食いはしたくないものダ。」

ゲラゲラ笑いながら指差す先は、狂乱した魔法使いが少女を押さえ込み、喰らう様。

泣き叫び暴れる娘を獣が喰らう。

正に地獄絵図。それを見て笑う彼らは地獄の住人か。いずれにせよ真つ当な精神ではない。

大盾を持った剣士と両手に短剣を構えた暗殺者が、背後に上がる悲鳴に動じる。相對する下品な魔法使いと異装の死霊使いが好機と見たか、距離を取りなおしスキルを発動させようとしたその時に。

「おう、おめーら。引き上げ時だ。クソツタレ、やっぱもう少し巻き込めないと話にならんわ」

ニクマン、やれ、と不機嫌な声色で撤退を促す。視線の先には動き始めた大集団。腹立ち紛れに蹴り込む先は芋虫に。グゲツ、と奇怪な声を上げ、痙攣。

「わかつた。撤退準備。」

クロスボウ

異形の肉塊が構えるのは機械弓。遠目からの対比では普通のクロスボウを構えているかのように見える。

近くで見ると異形が判る。明らかに大きい。まるで大型弩砲である。

「いくぞ、「星落し」だ。」

片膝を付き、狙いを絞る肉の塊が放つ矢。それは矢と言うよりも投槍。一人が持ち歩く物とは思えないクロスボウから射出された投槍は真つ赤な光を放ちながら猛進する。剣士も暗殺者も狙いを外したその一撃、頑強な石畳に大穴を穿つ。それは爆音と共に砂の嵐を巻き起こし、視界を塞ぐ。

「もう一発だ。」

到底連射できるとは思えないクロスボウに軽々と矢をつがえ、もう一射。今度は更に奥に。状況を理解し、こちらに駆け寄る一団の足元に見事に刺さる。視界が猛烈な砂の嵐に塞がれているのに見事な狙い。

その場に叩き込まれる逆襲の「火弾」、「影縫い」、「光の矢」。しかし、逆襲はかすりもせず空を切るのみ。

肉塊の放った2撃目が生み出した砂の嵐が晴れた時、7匹の悪魔

と、一匹の糞虫の姿は既に消えていた。

周りで爆風が吹き荒れようと、矢が降ろうが、火の玉が飛び交おうが関係が無い。

一体オレは何をした。一体何を食った。数瞬前のことすら思い出すのが苦痛だ。

飛び付いた。泣き女シルキーを助けた。庇ったから代わりに焼かれた。熱くて痛かった。

そうだ。そこまでは記憶にある。オレの意思でそうした。もう足を止めるのは嫌だった。反射的だった。そこまではオレの意思だ。

その後はどうだった？

何故、天使が血まみれでオレの下で狂ったように暴れ、絶叫している？

何故、その顔が恐怖に彩られている？涙と鼻水で見る影も無くなっている？

何故、その手が無い？オレの唇に触れた、その右手が食いちぎられたかのように無くなっている？

何故、その脚に幾つも噛み傷がある？白い骨まで露出するような、深い噛み傷がある？

何故、オレはその脚を両手で押さえている？

何故、オレの目の前に太ももがある？

何故、何故、オレの口の中には肉がある？

暴れ続ける被害者^{チャカ}の足がオレの顔を蹴りとばす。手が緩む。口腔内の肉が飛び出す。欠けた手足で必死にオレの下から這い出る幼女。

視線が合う。ひい、と顔が更に歪んだ。汚物、ゴミ、ケダモノ。そんなモノを見るような目。

おい、止めてくれ、オレをそんな目で見ないでくれ。仲間をそんな目で見ないでくれよ。何でそんなに怖がってるんだよ。

オレの近くに走り寄ってくる、豪奢な修道者と老魔法使い。ああ、ベルウッドとその取り巻きか。何か良く判らないけど、とりあえずチャカに回復飛ばしてやってくれないか。凄惨な我をしてるんだべ、早く頼むわ。何かオレ達にかまってる奴ら少ないからよお。

老魔法使いがオレとチャカに「深い眠りを」を使うのが判った。

抵抗しがたい睡魔がオレを襲い、気を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5699y/>

野郎達の英雄譚

2011年11月28日08時50分発行